

表紙, 目次, 雑纂, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38381

明治四十四年

發行



十全會雜誌

第六十二號

自第六十二號
至第七十一號

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第六十二號目次

○原著及實驗

- 紅肢痛に就て (Über Erythromelalgie) 楠田利一 郎氏
- 小兒尿道結石の一例 齋藤 義 雄氏

○雜 纂

- 六〇六號使用法并に注意。●六〇六號使用法。●新驅黴藥六〇六號に於ける新乳劑法、田中友治氏。

○學 會

- 金澤醫學會。

○通 信

- 生沼曹六氏通信。●田上清貞氏通信。●小山田基氏通信。●加藤錠吉氏通信。

○内地雜報

- 醫師増加。

○醫 校 雜 報

- 各所の新事業。

○校内雜報

- 講話部例会記事。●野球部設立。●野球部の印象。●野球戦成績表。
- 本校對一中弓術任合。●弓術部秋季大會。●田上清貞氏歡迎會。●河合鷲氏歡迎會。●猪木彦助氏通信。●久保武氏通信。●菊地文彦氏通信。●杉山政長氏通信。●中島誠氏通信。

○人 事

- 高安、上田教授昇級。●石川教授。●鬼頭教授。●脇坂教授。●石坂講師。●鈴木氏。●河合氏。●寺本氏。●生沼氏。●橋本氏。●田上氏。●齋藤氏。●石橋氏。●永井氏。●吉田氏。●太田氏。●日野氏。●齋藤氏。●長井氏。●永井、鈴木、市川、太田、林、赤尾、山田氏。●井口、大澤、實達氏。●萩野氏。●黒田、進士氏。●和田氏。●四十三年度陸軍見習醫官。●研究生。●在外國會員。●ドクトル竹中氏。●長村氏。●正木氏。

○會 告

- 校外十全會費納付調書

○附 錄

- 小川先生遺族。●吊小原芳雄君遺逝

手術後患者ノ尿ヲ検査セシニ弱酸性ニシテ僅ニ尿混濁アリシモ三四日ニシテ清澄トナレリ敢テ膀胱加答兒等ノ症狀ヲ認メナリキ抽出セシ尿道結石ヲ記載スレバ下ノ如シ

重量 ○、四五(抽出後二日ノモノ)
形態 長徑 一、二仙迷
横徑 上頭七、○密迷
中體六、○密迷
下尾四、○密迷
厚徑 中體四、○密迷
中體六、○密迷
下尾三、○密迷

表面 粒々凹凸不上大頭部ニ於テ特ニ著明但シ兩側面ハ粗造平坦ナリ

色澤 帶褐黃色但シ兩側平坦面ハ帶黃白色

硬度 硬固ニシテ質緻密

横斷面 層疊

比重 大

如上ノ結石ハ頭部即チ太キ部分ナ上方ニ尾部即チ細キ部分ヲ下方ニ向ケテ尿道内ニ固ク捲入セリ抑モ斯ノ如キ尿道結石ハ最初ヨリ尿道内ニテ形成セシモノナルカ果タ又最初膀胱内ニテ形成セシ結石カ或ル機會ニ尿道ニ向テ流下シ尿道内ニ停留シ後尿道内ニテ益々増大シ今日ニ至リシモノナルカハ疑問ナリ、余想フニ後者即チ最初膀胱内ニ形成セシ結石カ或ル時期ニ尿道ニ流下シ漸次増大現狀ノ如キ比較的大ナル尿道結石トナリシモノナランカ終リニ臨ミ畏友内藤誠意君カ本患者手術ニ際シ助力ヲ與ヘラレタル厚意ヲ謝ス(終)



(雜纂)

雜纂

六〇六號 使用法并に注意

▲序 説

六〇六號(ヂオキシ、ヂアミド、アルゼノベンツォール)は化學的療法(ヘモテラピ)が産出せる最も優秀なる藥品也。茲に其使用法を述ぶるに當リ先づ化學的療法ある者の概説并に本劑の化學的藥物的地位に就て略説するの要ありと信ず。

抑々化學的療法は從來の藥物的療法と共に化學品を以て疾患を治癒する者なれば、汎き意味に於て其間何等選ぶ所無し。然りと雖も其研究上の立場に於ては二者全く其趣きを異にす。即ち從來の藥物的療法は健康體に對し、或藥品が如何に作用するやを研究する者にして換言すれば、或藥品は如何様に生理的組織又は臟器に作用するやを研究し、延いて之を療病上に應用するにあれども、化學的療法は是に反し病體即ち動物をして疾病に罹らしめ或藥品が此疾病其者に對し如何に作用するかを研究する者にして、即ち前者の歸結が對症的なるに對し本療法は實に原因的なるを異にするもの也。此種療法の研究は之を實驗治療學と稱し血清療法、狂犬病療法「ツベルクリン」療法等の免疫療法及び臟器療法はこれに屬す。

蓋し藥品の作用は細胞又は病體等と結合する事を意味する者に於て、此結合は二考相互の間に親和力あるに依りて存す。彼の血清療法に於ける抗毒素と毒素の關係の如き即ち是れなり。而して血清療法に於ける抗毒素は單に毒素とのみ結合し之を中和して無害と爲し、敢て他に細胞組

織と親和力を有せざるを以て何等の副作用無し(普通注射血清に見る所の多少の副作用は抗毒素其者に因るに非ずして馬の血清成分に因す)是れ實に理想的の藥品なりと云はざるべからず。而して此抗毒素が毒素と結合し或は或る藥品が一定病原體と結合すべき事は、實にエーリツヒの一大思想たる『總ての生活細胞及臓器中の一定成分は一定の化學的物質に對し交互に特殊の化學的親和力ありて、他の成分はこれに反して更に他の物質と特異の結合力を有すべき所謂分布法則なる者ありて存す』と云ふに一致する者にしてエーリツヒは先きに生體染色なる者を行ふて其思想を立證したるで側鎖説(ザイテンケツテン、テオリ)を以て毒素抗毒素の關係を闡明したり。如上の思想を有し又た血清療法を説明せるエーリツヒは更に左の如きを推想したり。曰く人體の細胞組織に何等作用する事無くして獨り病原體にのみ作用する化學的物質のあり得べきこと是れなり。然り或程度迄で既に是れに近似せる者あり即ち『マラリヤ』に對する『キニーチ』黴毒に對する汞劑の如き是れ也。去れど斯の如き物質を單に經驗に依りて俟つとせんが百年河清を待つ其よりも迂也。寧ろ進んで之を人工的に作成するを以て捷徑なりとす是れ實に化學的療法の起原なり。然りと雖も今日迄の經驗に依れば血清療法の如く單に病原體にのみ作用し少しも人體に作用せざる藥品を得ること雖し。前述の如く今日迄で知られたる化學的物質は病原體と結合するのみならず動物體とも結合するを常とす。此動物體と結合すべき性質を『オルガノトロープ』と云ひ、寄生體(パラジターテン)と結合すべき性質を『パラジトトロープ』と云ふ。此『パラジトトロープ』に強きだけ、『オルガノトロープ』に弱きだけ、其れだけ藥品の治療的效價は優越せざるあり。換言すれば致死量の十分の一を以て治癒し得る藥品は五分の一を以てする者の其れよりも優秀なりと云ふ事也二二三分の一と云ふが如きものは藥物的價値無し。

化學的療法の創始以來今日迄で知られたる藥品は大略之を三種に分類す

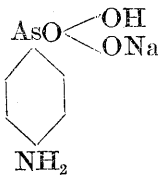
る事を得べし。

(一)『ベンチン』色素 就中最も早く知られたる者は『トリパンロート』なり。是れエーリツヒ及志賀氏の業績也。次で『トリパンブラウ』『トリパンガ非オレット』の二あり次は

(二)『トリフェニールメタン』列の色素 『メチレン』青、『マラキツト』綠、『パラフクシン』、『トリパロサン』等諸種あり。次は

(三)砒素化合物 是れ最も必要の者也。亞砒酸が種々の疾患に使用せられ、多少の效ある事は既に以前より知られたれども、其『トリパノゾーム』病に有效なることは千九百二年佛蘭西のラブレラン及メニールに依りて初めて知られたり。然れども亞砒酸は甚だ強毒の性あるが故に其充分なる分量を患者に應用することは困難なり。然るに彼の有名なる『アトキシール』は已に古く獨逸に於て製造せられたる者なれども之れが『トリパノゾーム』患者に使用せられたるはトーマスに初る。而して本劑は比較的少量の砒素を含有するに係らず無害にして即ち有效なるに依り甚だ聲名ありたり。

茲に於てエーリツヒは深く本劑の造構を研究し、從來『メタンアルセン』ズイレ、アニリド』なりと思惟せられたる者が實は砒酸『アニリド』に非ずして砒素が偏蘇克拉ミ強固に結合し『パラ』の位置に『アミド』の入りし者なる事を確定したり。其記號左の如し

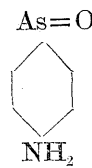


斯の如く『アトキシール』の造構明瞭さふりしは、實に重要なる事實にして、之れあるに依り今日多數の砒素有機性化合物の誘導體を作るを得るに

至りしなり。幸に此研究ありしに依り諸種の誘導體は作成せられ爲めに實際上有效なる藥品を得るを得たり。六〇六號の如き即ち其れなり。次に或る藥品が如何に有效なるや否やを試験するには、先づ藥品と病原體とを接觸せしめざる可らず。其方法に二あり一は試験管内に於てし一は動物體內に於てす。二者一長一短あり共に廢すべからず。

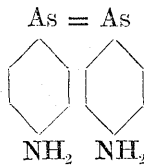
初めエールリツヒは『アトキシール』と『トリパノゾーメン』を試験管内に於て接觸せしめたるに五十倍の濃度を以てして猶且つ何の働き無きに拘らず、之を動物體內に於て試験せるに其作用大に強きを實驗したり。是れ甚だ奇なる現象と云はざるべからず。何と云へば試験管内に於ては『アトキシール』は専ら『トリパノゾーメン』のみ作用し得れども、動物體內に於ては『トリパノゾーメン』の外、動物體の成分にも作用し其力從つて減弱すべき筈なれば也。エールリツヒは此間接的效力を説明すべく思ひ浮びし者は動物體の還元作用ありき。蓋し動物體は種々の物質を還元す、例へば『メチレン』が動物體內に還元せられて無色とふるが如し又た『カコザール』が動物體內に還元せられ有毒とふるこゝ等は已に六十年前アンゼンが知りし所也。而して亦た或原素の親和力の全部が飽和せられたる化合物は其親和力の一部を残す所の化合物よりも其作用弱し、例へば酸化炭素の炭酸よりも強毒なるが如き、又五價の全部を以て飽和せられたる砒酸が比較的無毒ふるに拘らず三價だけにて結合せる亞砒酸が非常に強毒ふるが如し。此等の點に着目せるエールリツヒは五價の全部を以て飽和せる『アトキシール』が動物體內に於て還元せられ三價の化合物とさりて其效力を發揮するには非ざるかと。茲に於て人工的に『アトキシール』を還元し三價の化合物を作り、之を試験管内に於て『トリパノゾーメン』に試験したるに『アトキシール』が五十倍の濃度に於て何等作用無きに對し、本劑は實に一千萬倍の稀釋に於ても猶且つ有力なる作用あるを實驗したり。豈に驚くべき變化と云はざるべげんや。是れ即ち『アルゼノオキシール』

ド』化合物にして、普通(As₂O₃)化合物と稱する者也。其記號左の如し)



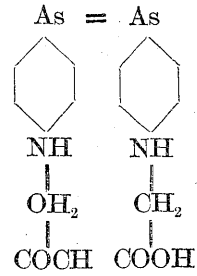
本劑は斯の如く有力なる化學品ふりも雖も又た動物體に對し甚だ有毒あり。即ち『パラジト』、『ロープ』に強けれども又た『オルガノトロップ』に強烈なるを以て寧ろ恐るべき毒物也。

而して更に還元を進むる時は酸素は全く去られて、二個の砒素が二價を以て互に結合し一價を以て『ベンツオール』核と結合したる同く三價の化合物を得べし。之を普通單に『アルゼノ』化合物と稱し、左の如き記號を有す。

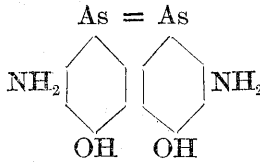


本劑は之を先きの『アルゼノオキシード』化合物に比すれば、其力稍々弱し雖も其效力の弱きは僅微にして動物に對する毒性は大に弱し。故に其藥效的價値又た從つて大也。彼の有名なる『アルゼノフェニールグリチン』及び六〇六號は共に此『アルゼノ』化合物に屬する者也。

凡て化學的製劑は其一原子を換ゆるも其效力毒性に非常なる變化を來す者なれば從つて多數の製劑を作り、之を一々藥物學的に検査せざるべからず。斯て『スパイヤール』、『ハウス』に於て殆んど無限に多數に作りたる誘導體の内、先づ藥物的價値の優劣ふる者として『アルゼノフェニールグリチン』を得たり。其記號左の如し。



本劑は二十瓦の『マウス』に七十倍の液一ccを注射するとを得、『トリパノゾム』鼠を完全に治療するに僅に六百五十倍溶液にて足る。即ち致死量の九分の一にて治療の目的を達するを得べし。故に『パラットトロープ』が『オルガノトロープ』に比し非常に高き理想的に近き者也。而して本劑は亞弗利加に於て睡眠病の患者に使用し良好の成績を収めつゝあり。次に出てたる者は六〇六號也。本劑は『ナオキシザアミドアルゼノマンツォール』と稱し左の如き記號を有す。

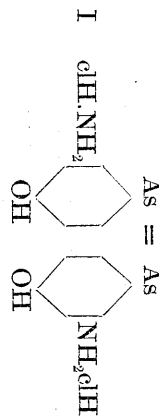


本劑は始め専ら『スピルレン』に就て研究せられ、先づ再歸然に對し大に優秀なる効果を擧げ、次で敵毒に對し又た今日の盛名を馳するに至れり。而して是れ實に秦氏がエールリツヒの下に發見せる者にして、本劑を得るに及んで化學的療法なる者は實驗治療學の一として最も重大なる地歩を占

むるに至りたる也。次に本劑は『トリパノゾム』病に對し『アルゼノフエニールグリン』を優劣未だ殆んど決し難きの效あり。

▲六〇六號の性状

前述の如く六〇六號は單に『ナオキシザアミドマンツォール』を稱し元と前記の如き記號を有する者ふれども、此分子の NH_2 は酸と結合し、又た OH は鹽基と結合すべき性質を有するを以て今日六〇六號と稱し使用に供する者は、實は化學製劑上の都合により再方の H_2N に鹽酸一分子宛を結合したる酸性鹽也。(記號I)

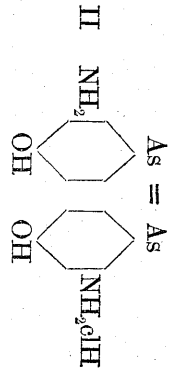


本劑は淡黄色の粉末にして其少量宛を眞空管内に貯藏保存するを要す。是れ本劑は極度に還元せられたる化合物なるを以て、少しく空氣に觸るゝも直ちに酸素を攝つて酸化するに依る。然る時は AsO_3 化合物とさるるを以て甚だ危険也。故に常に窒素瓦斯中に精製及び乾燥を行ふ所以なり。

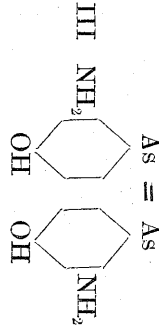
▲溶液の製法

本劑即ち鹽酸鹽は容易く水に溶解すれども、強酸性反應を有するを以て其儘之を注射するを得ず。(記號I)

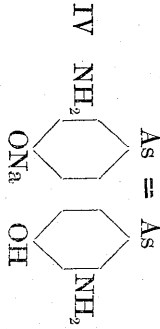
今此酸性溶液に少量の苛性那篤倫を加ふる時は潤濁を生ず。去れど振盪する時は再び透明とさる。猶徐々に那篤倫を加へ其生じたる沈澱が之を振盪するも既に透明とさるるに至れば六〇六號一分子中の一方の鹽酸は去りてたゞ一方のみ残るに至る之本劑の一塩酸と稱し『モノヒドロクリッド』の状態とありし者也。(記號II)



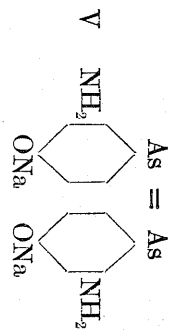
更に那篤倫を加ふる時は左右の鹽酸は悉く去り全く中和せられて中性鹽と成る。然る時は六〇六號全部は沈澱す。若し之を振盪する時は全液全く乳劑状とふる。(記號II)



更に那篤倫を加ふる時はOH中のHは徐々にNH₂に代り同時に液の潤濁は再び減す。されど其二個のOH中一個だけふる時は未だ全く透明の度に至らず。(記號IV)



更に増加する時は徐々に透明を加ひ分子の大半に於てOHも二個共に代る時は全液再び透明とふる。是れ即ち強亞爾加里性反應を呈する液なり。(記號V)



初め本劑は此透明の液からざる時は有效ならずと思惟し之を以て筋肉内に注射したりしが、效力は強しと雖も疼痛劇烈にして使用甚だ困難ありき。但し再歸熱に於ては靜脈内注射を行ふを以て斯の如き事無く又此透明液を使用するを通則とす。次に同く透明ふる液一酸鹽(記號II)を使用したるに疼痛稍々減り效力は別に大なる變化を見ず。

伯林のウエクセルマンは不透明なる中性乳劑(記號III)を使用したるに臨床上に於て致て效力の差異を認めず而かも疼痛甚だ弱く、患者に依りては殆んど全く疼痛を感ぜざりき。加之筋肉内のみならず皮下にも注入し得る事を知るに至れり。爾來此中性『エムルヤオン』は最も多く一般に使用せらるるに至れり。

或は曰はく強亞爾加里性液と中性乳劑との中間に位する潤濁したる液(記號IV)を用ゆる時は疼痛致て強からず吸收又た大に良好なりき。

又た酸性の溶液は元より好ましくならず雖も六〇六號の粉末其儘を流動『パラフィン』或は『オレーフ』油に混じ乳劑として用ゆる時は疼痛少く且つ方法簡單ありと稱し近時クロロマイエルに依つて實用せらる。されど此は效力或は遅からざるか、兎に角以上記號の五個は今日迄で既に試用せられ何れも共に有效ふる者也。而して以上の五個は疼痛の關係に於ては各個の優劣既に明瞭ありと雖も其效力の程度が果して同一あるか殊に效力の現るゝ時間即ち病毒を消滅せしむるに要する時間が同一あるかば猶精密なる比較を俟たざるべからず。只だ患者の自覺より云ふ時は中性『エムルヤオン』は最も堪え易し。彼の『ヘックスト』會社が『サルヴァルザン』の使用溶

液として示指せる者は實に記號II及Vの者也。

而して右五個の何づれが最も有效なりやと云ふが如き試験は一般開業醫の爲し得べき事にもあらず、時に反つて不測の障害あるべきを以て一々之を詳記せず。唯だ『ヘックスト』會社が示指せる『サルウアルザン』の溶液製法の用量及び注射の部位に就て記載し次で『サルウアルザン』の使用法なる題目の下に差し當り實地醫家に必要なる點を詳述すべし。

▲用 量

人體が何程の分量迄で本劑に堪へ得るやは元より試験するを得ずと雖も、今日迄で使用せられたる最大量は一、五瓦かり一、〇乃至一、二は既に頗る多數の患者に試用せられ而かも無害かりき。去れど治療上には體重一庇に就て〇、〇一を用ゆる時は略ぼ充分なるべし。たゞ單に症狀を消散せしむるには一庇に就き〇、〇〇五乃至〇、〇〇七にても足れり、去れど此分量にては再發の恐れあり、故に少くとも〇、〇〇八乃至〇、〇〇一を用ふるを要す。今體重一庇に就き〇、〇一とする時は歐洲人には〇、六乃至〇、七位、日本人には〇、四乃至〇、六平均〇、五位かりとす、但し右は微毒に於ける筋肉内注射又は皮下注射の場合を稱する者にして若しも再歸熱に於ける靜脈内注射の如き場合は〇、三位にて可あるべし。之を日本の量目に算すれば例へば拾貳貫目の者には〇、四又拾五貫目の者には〇、五なるが如し。今假りに五十庇の日本人に〇、五を試み、猶不充分かりき思惟するに際し、更に二―三週間にして〇、四―〇、五を反覆するは別に危險無く或は反つて必要あるやも知らざれども、始めより〇、二或は〇、三と云ふが如き少量を反覆して用ゆる時は奏效不充分なるのみならず、本劑に對し病原體は習慣し所謂不感種を作るの恐れあり。蓋し化學的療法を行ふに二途あり。一は階段的療法を稱し一時に病毒の大部分を消滅せしむるに足る少量を反復作用せしむ方法にして彼の『キニーチ』の『マラリヤ』に於けるが如し。一は強

力滅芽療法を稱し可及的一回に寄生體を消滅せしむる法あり。本劑の應用は可成強力滅芽療法の綱領を方針とすべし。次に婦人及小兒等は體重に應じて分量を加減せざるべからざる事は無論あり。換言すれば六〇六號の用量は個人々々に體重を量り然る後ち用量を決定するを最も適法かりとす。

猶茲に一言すべき事あり。ちば乳兒の先天微毒に就てあり。抑々先天微毒を有する初生兒は甚だ虛弱あるを以て直ちに是れに本劑を注射する事は稍々危險かりとす。即ち一は斯る小兒は藥品に對して抵抗力弱きを以て中毒を起し、易くた一つには先天微毒の小兒の體內には實に無數の(充滿し居ると云ふも可ある程)『スピロヘーテ』を包藏するを以て、これに藥劑を注射して一時に『スピロヘーテ』を撲滅せしむる時は、其毒素は一時に遊離し爲めに之れが中毒を起す危險あればあり。然るに茲に面白るき臨床的實驗は此問題に有力なる解決を與へたり。そは母體が強度の微毒に侵され其妊娠中本劑を使用し得ざりし者に對し、其産後少しく營養輕快したりし時は是れに本劑の注射を行ひたるに、其時迄で小兒は高度の先天微毒の爲めに營養不良體重殆んど増加せざりしが、注射後母體の病狀輕快すると共に乳兒の他覺的症狀大に快癒し殊に急に著しく生長して體重又た速かに増加したりとす。斯の如きは今日迄で已に數多の例あり。ウエクセルマンの試験に依れば、先天微毒の高度にして豫後不良と決定せる患兒に對し、一名は對照として治療を行はず、一名は水銀療法を行ひ、其他數名に六〇六號を使用したりしに、治療を加へざる者と水銀療法を行ふたる者とは凡て死亡し、六〇六號を使用したる者の半數は生存し他の半數は死亡したりとす。故に斯る小兒に本劑を使用するは全然危險無しと云ふべからず。

如上母乳に依る乳兒の良好なる結果を以て母體の一時的免疫即ち免疫體が母乳により小兒に移行するに因ると云ふに歸すべきや、或は砒素劑の移行に歸すべきやは猶未定の問題ありと雖も、兎に角小兒に直接注射するより

も安全なる方法ありと思惟す。但し單に母乳に依り乳兒先天梅毒の全治を期すべからずと雖も、之れに依つて稍輕快し體力の増加するを俟ち且つ一方には「スピロヘーテ」の減少するに及び更に本劑の注射を行ひ其全治を計らんか危険無くして其目的を達すべき也。

▲注射の方法

注射の方法には諸種あり。

(一) 靜脈内注射 を行ふには透明なる亞爾加里性溶液(前掲記號V)を、四十度に温めたる無菌の生理的食鹽水を以て、凡そ五百倍乃至千倍位に稀釋し、普通生理的食鹽水の靜脈内注射の術式に従ひ注射す。本劑は稀釋する程危険無し。用量は日本人に在りては〇、三位迄でざるべし。此靜脈内注射は無痛且つ效力迅速なりと雖も、其手術最も嚴正に無菌的ならざる可からず、故に病院等の外は一般に行ふ事困難なるべし。

次に靜脈注射に依る本劑の效力は一過性にして持續的ならず。故に再歸熱に對しては固より此法に依るを可とすと雖も、梅毒に對しては浸潤組織内に深く潜在する病毒に對し充分其作用を達する事能はず爲めに病毒の一部は生存して再發を來す場合あるべし。

(二) 筋肉内注射 に於ては嚴重なる無菌的操作を要するは無論ありと雖も之を靜脈内注射に比すれば手術大に單純あり。而して藥劑の效力は靜脈内注射に比すれば勿論緩慢なりと雖も其持續的なるを勝れりとす。即ち藥品の一部は暫く注射部に止まり、徐々に吸收せらる。此關係は中性乳劑に於て殊に著し。且つ比較的大量を使用し得るを以て優れりとす。

(三) 皮下注射 には既述ウエクスセルマンが經驗せる如く中性乳劑は患者能く是れに堪へ又た能く吸收せらる。たゞ皮下組織の薄き者にありては、茲に生じたる硬結鶏卵大に隆起し數週間殘存することあり。但しこは無菌的に注射せられたる時は決して蜂窩織炎或は眞の膿瘍を形成すること無く、其硬結は徐々に吸收せらるゝが故に、切開等を試み反つて病芽を浸入せし

むることを禁ずべし。去れと温醫法を試むるは大に長しとす。次に本法も又た比較的大量を處する事を得且つ效力持續的なるに於て、筋肉内注射と共に靜脈内注射に勝れり。然りと雖も藥品が久しく局所に殘存する時は、時に左の如き危懼無しとせず。即ち其一部分が徐々に分解し亞砒酸の如き強毒物に變ずる恐れあることは是れなり。

▲「サルウアルザン」の使用法

「サルウアルザン」は即ち六〇六號也。故に前段記せる所の者及び更に後段記せる所の者は凡て本劑使用上の思料なり。然るに余が茲に特に「サルウアルザン」の使用法ある題目を設けたる所以の者は當面の急に應ずる上に於て且つ會得を簡短にする上に最も便宜なるを信ずれば、「ヘックス」社本劑の溶液製法上二個の方式を示したり。一は中性乳劑を製する法、二は「アルカリ」性溶液を製する法并に靜脈内注射に際する「アルカリ」性溶液の稀釋度走れり。而して溶液製造上六〇六號の紛末と之れに加ふる那篤倫液との分量的關係を示せるものは左表の如し。

(中 性 液 を 作 る に 要 す る)
那 篤 倫 液 の 量

606號	15% 藥用那篤倫液		數は
	重 量	容 量	
0.1	0.09	0.076	1-2
0.2	0.18	0.152	3-4
0.3	0.27	0.228	4-5
0.4	0.36	0.304	6-7
0.5	0.45	0.388	8
0.6	0.54	0.456	9-10
0.7	0.63	0.512	11-12
0.75	0.675	0.55	12
0.8	0.72	0.608	12-13

(亞 爾 加 里 性 液 を 作 る 同 量)

0.5	1.09	0.94	19
-----	------	------	----

例あり、且つ血壓の變化を來すは事實あるを以て血管系統の疾患は勿論結核も雖も咯血し易き傾向ある者は之を慎むの必要ありと信す。

▲本劑使用上の注意

(一)最も注意すべきことは本劑の酸化を顧慮する事也。前述せる如く本劑は極度に還元せられたる化合物なるに依り極めて酸化し易きものなれば、使用の直前に於て硝子管(容器)を開き、直ちに溶解し、直ちに使用せざるべからず。若し一と度び閉口したる硝子管内の粉末を残り後日之を使用し、或は一と度び溶解したる者を後日使用するが如き事あらば、甚だ危険なる者にして其酸化の程度に依りては生命を失はしむる恐あり。次に容器は使用前必ず精細に之を検査し、若し破損の箇所等あらば、たゞへ僅微も雖も決して之を使用すべからず。又た本劑の黒色或は褐色なる者は使用すべからず。本劑は淡黄色の粉末也。

(二)本劑の中性液は沈澱を生じ易きを以て、注射器に吸引する際、計量、又は分割の際に充分攪拌若くは振盪を忘るべからず。

(三)本劑の使用に際しては凡て消毒的無菌的からざるべからず。殊に靜脈内注射の如き決して設備不完全の下に輕舉妄動すべからず。

(四)猶注意すべきことは前文各所に隨時記載しあるを以て熟讀せらるべし。

(五)次に本劑使用後一時病變部に刺戟性の症狀を呈することあり其最も著しきは皮膚の發疹也所謂ヘルクスハイマー氏現象これ也。是れ水銀療法に於ても屢々見る所也。

▲本劑使用ミリツセルマン反應

本劑を以て治療を行ふたる後ミリツセルマン反應が如何に變化するやを觀察するは、病の経過を卜する上に於て必要ありとす。此反應は今日迄の成績を綜合し見るに大抵加療後徐々に減弱し、其全く消失するは早きは一二週、多くは三四週、遅きは六七週を要するものあり。又た反應に餘り變化

の起らざる場合あり。從て各『クリニク』の報告一致せず。即ち $30/100$ に於て消失したりと云ひ、或は僅かに $20/100$ に於て消失したりと云ふ。然れども斯の如きは猶長期の検査を行ふに非ざれば果して患者の何り迄で反應消失するや決定し難し。次に注射後暫時反應増加する事あり。又た初期患者の未だ反應無き者が注射後反つて陽性となる事あり。是れ治療の爲め病原體が遊離して『アンチゲン』が遊離するに依るものあるべし。此關係に於て、梅毒症狀あるもミリツセルマン反應無き疑はしき患者に鑑別診斷の目的の爲めに使用する者あり。

要するにミリツセルマン反應の消失は本劑の効果をトすべき最も重要なる指針なりと雖も此反應もたゞ大體を示すに過ぎず。即ち治療後反應陰性と亦るも必ずしも其全治を確定する能はず。實際多くの場合は全治せるからんが、他の場合に於ては病原の數著しく減少しミリツセルマン反應を起すべき『アンチケルセル』非常に減少し吾人が證明し得る限界の下に居るに過ぎざること亦たあるべし。故に本劑の爲めに全治したりと云ふことは永き年月の間幾回か検査を反復し更に反應陰性にして症狀も又た起らざる時に初めて云ひ得べき事なれば、猶數年の觀察を要すべきなり。因に傳染病研究所に於ては料金三圓を以てミリツセルマン反應の依頼に應ずる由)

▲梅毒の治療と免疫

梅毒を治療したる後免疫性を來たすや否やは既に以前より諸種の說あれども、近年ナイセル氏が猿に就てふしたる多數の試験に依れば敵毒が完全に治癒したる後再び接種を行ふ時は又た感染す即ち免疫性を有せず。之に反し治癒したるが如き状態にあるも體內例へば脾臓内に僅かに梅毒の存することあれば再接種に感染せず。是に依つて考ふるに梅毒は其免疫全然不可能なりとも云ふ事能はざれども假りに免疫性ありとするも其持續極めて短く治癒後速に消失する者と考へざるべからず。秦氏が六〇六號を以て治癒したる家兎の試験に依れば角膜又は陰囊に於て一と度び疾患を経過

〇、五〇	〇、四五〇	〇、三八〇	八
〇、六〇	〇、五四〇	〇、四五六	九一十
〇、七〇	〇、六三〇	〇、五一二	十一十二
〇、七五	〇、六七五	〇、五五〇	十二
〇、八〇	〇、七二〇	〇、六〇八	十二十三
〇、九〇	〇、八一〇	〇、六八四	十四十五
一、〇〇	〇、九〇〇	〇、七六〇	十六

乳劑製法ハ簡單ニシテ僅カニ數分ヲ要スルノミ、乳劑製造終ルヤ太キ白金注射針ヲ用ヒテ直チニ注射ス可シ。乳劑ハ嚴重ニ無菌的ニ作り、注射部ハ沃度偏陳若クハ沃度丁幾ヲ用ヒテ消毒ス可シ。

クロマイエル氏ニヨレバ「サルブレンサン」ノ「パラフィン」乳劑モ亦皮下注射ニ適ス、斯クセンニハ〇、六瓦ヲ無菌流動「パラフィン」ニテ磨碎シ全量ヲ六c.c.ト爲ス。

神經質ノ患者ニハ注射前局部ニ一%「ノウオカイン」液ニc.c.ヲ注射シテ全ク無痛トスルヲ可トス。後來ノ疼痛或ハ反應性疼痛性浸潤モ亦濕布、坐浴等ヲ用ヒ或ハ加温ニヨリテ之ヲ輕快セシムルヲ得シ。

靜脈内注射用「アルカリ」性液ノ製法
血管内注射ニハ上記ノ乳劑ヲ用ユ可カラズ、完全透明ナル溶液ヲ使用スベシ。其ノ製法次ノ如シ。

例ヘバ「サルブレンサン」〇、五瓦ヲ一五%局方「ナトロン」液一、〇九瓦即チ〇、九四c.c.或ハ約十九滴ト共ニ陶製乳鉢中ニテ磨碎スレバ透明「アルカリ」性溶液ヲ得。

之ヲ血管内ニ注射センニハ此溶液ニ滅菌生理的食塩水(〇、九%)一〇〇—二五〇c.c.ヲ加ヘテ稀釋シ、滅菌濾紙ヲ用ヒテ濾過ス。

血管内ニ「サルブレンサン」ヲ用フル時ハ砒素ハ約三—四日ニシテ全部體內ヨリ消失ス、反之皮下若クハ筋肉内注射ニテハ非常ニ長時間體內ニ殘留ス。

故ニ二三ノ臨床家ハ兩法ノ強力性及持續性作用ヲ併用セシコトヲ企テタリ、即チ先ツ〇、四—〇、五瓦ノ「サルブレンサン」ヲ血管内ニ注射シ、二三日後更ニ〇、三—〇、四瓦ヲ筋肉内若クハ皮下ニ注射スルニアリ。

警告
「サルブレンサン」ハ空氣ニ觸ル、トキハ容易ク酸化シテ劇毒ニ變スル性アリ故ニ空氣ヲ排除シテ之ニ代フルニ無害ノ瓦斯ヲ詰メタル硝子管中ニ收メ酸化作用ヲ防ク

注射直前ニ造ラレタル溶液若クハ乳劑ノ外決シテ使用ス可ラズ。「サルブレンサン」ハ鮮黃色ヲ呈ス。灰色或ハ褐色等ニ變色セルモノヲ用フ可ラズ。運搬中破損サレタル容器中ノ内容及ビ既ニ開口シテ時ヲ經タル容器中ノモノハ患者ニ危險ナルヲ以テ決シテ用フ可ラズ。

「サルブレンサン」靜脈注入法

「サルブレンサン」ノ靜脈内注入ハ最近ノ經驗ニ據ルニ他ノ注射法ニ優ルヲ以テ特ニ之ヲ推賞ス。其ノ方法ヲ正確ニ行ハゞ注射部ニ何等ノ不快ナル局部症狀ヲ生セズ。

靜脈内注入ニハ平均次ノ量ヲ用フベシ。

婦人 〇、三「グラム」 「サルブレンサン」

男子 〇、四「グラム」 「サルブレンサン」

ヨリ多量即チ〇、五「グラム」ヲ靜脈内ニ注入スルハ必要ナカルベシ。同量ノ靜脈注射ヲ三乃至四週ノ後反復スベシ。過敏症狀ハ注入ヲ反復スルモ發生セズ。

靜脈内注入ニ要スル「アルカリ」性液ヲ造ルニハ次ノ分量ヲ要ス

サルブレンサン 一五%「ナトロン」液

〇、六「グラム」 一、三〇八「グラム」 約一、一四cc 約二十三滴

〇、五同 一、〇九同 同〇、九五 同十九同

〇、四同 〇、八七二同 同〇、七六 同十六同

〇、三同 〇、六五四同 同〇、五七 同十二同
〇、二同 〇、四三六同 同〇、三八 同八同

現今販賣セラル、「サルブルザン」ハ一瓶〇、六「グラム」ヲ含有ス。
此量ヲ溶解スルニハ次ノ如クスベシ

容量三〇〇、c.c.ノ割合セル滅菌「メスチリンデル」(共口硝子栓ヲ有シ且
少細頸ノモノ)ニ約五十箇ノ滅菌硝子球ヲ入レ化學的純粹ナル食鹽ト滅
菌蒸餾水ヨリ製シタル滅菌生理的食鹽水(〇、九%)三〇一四〇、c.c.ヲ加フ。
是ニ於テ「サルブルザン」〇、六ヲ投シ強ク振盪シテ溶解セシメ。更ニ此
溶液ニ上表ニ從ヒ一五%「ナトロン」液二十三滴ヲ加フレバ沈澱ヲ生ズレ
ドモ強ク振盪スレバ再溶解ス。此透明黄色溶液ニ滅菌生理的食鹽水ヲ加
ヘテ三〇〇、c.c.ト爲ス此時全ク透明ナラズンバ更ニ「ナトロン」液一二滴
ヲ加フベシ。

此溶液五〇〇、c.c.ニハ「サルブルザン」〇、一「グラム」ヲ含有ス故ニ一五〇、c.c.
ニハ〇、三「グラム」P二〇〇、c.c.ニハ〇、四「グラム」P二五〇、c.c.ニハ〇、五
「グラム」ヲ含有ス。

此溶液ヲ靜脈内ニ注射センニハ普通ノ靜脈注入用注射器ヲ用井或ハ二五
〇、c.c.ヲ入ルベキ下部細キ「ビュレット」(五〇c.c.ツ、ニ割合セルモノ)ヲ用
ユベシ。此「ビュレット」ニハ細キ護誤管ヲ附シ其ノ下端ニ「グエツチハー
ン」及ビ靜脈「カニューレン」ヲ挿入スベシ。今「グエツチハーン」ヲ開キテ
數滴ノ溶液ヲ流出セシメ以テ護誤管内ノ空氣ヲ除キテ靜脈ニ刺入シ「ビュ
レット」ヲ上ゲテ溶液ノ靜脈内流入ヲ調節スベシ。

硝子球ヲ入レタル割合「チリンデル」ヲ缺ク時ハ次ノ方法ニ據リテ滅菌小乳
鉢ニテ「サルブルザン」溶液ヲ製スルヲ得ベシ。
硝子管ノ内容「サルブルザン」〇、六「グラム」ヲ滅菌セル小乳鉢ニ出シ滅
菌セル滴下「ピベット」ニテ一五%「ナトロン」液二三滴ヲ粉末ノ上ニ加ヘ
滅菌セル小乳棒若シクハ太キ硝子棒ノ圓端ヲ以テ混和磨碎スレバ直ニ透

明ナル黄色液ヲ得ベシ。コレヲ生理的食鹽水ニテ三〇〇、c.c.ニ稀釋スベ
シ。

上記ノ「サルブルザン」靜脈注入法ハ元ヨリ直チニ一般ニ適用スル能ハズ。
療法ノ強弱ハ患者ノ病狀ト感染ノ模様トニヨリテ異ニセザルベカラズ。
既ニ公ニセラレタル文獻ニ徴スレバ原發性下疳并ビニ殊ニ第二期黴毒ノ早
期ニハ特ニ強力ナル療法ヲ要スルモノト謂フヲ得ベシ。

神經中樞及ビ心臓ノ疾患ヲ有スル患者ハ治療ニ適スルモノニ於テモ大ニ注
意ヲ要ス。或ハ少量(〇、二一〇、三「グラム」)ヲ使用スルコト安全ナルベ
シ。第一回ノ注射ニヨリ堪ヘ得タルトキハ更ニ二日ヲ經テ上記ノ少量ヲ
注射スベシ。カ、ル患者ニ對シ他ノ注射方法ヨリモ靜脈注入法ヲ實用スベ
キカ否カハ未ダ確言スル能ハズ。兎モ角モ重キ心臓患疾ハ「サルブルザン」
ノ靜脈注入ニ對シ嚴重ナル禁忌ナリトス。(丁)

●新驅黴藥六〇六號に於ける
新乳劑法に就て

醫學博士 田中友治

此新驅黴劑六〇六號の螺旋菌屬より起る諸種の疾患に對し、殊に黴毒の病
原菌「スピロヘータ、パルリダ」に對し、強度の滅殺力を有するは秦氏に依テ
動物試驗せられたり其後イウエルセンは再歸熱患者アルトは黴毒患者に應
用せり次でウエクセルマンシユライベル、ナイサー、余等に至る迄世界に
於ける各専門家は競て是を實驗するに至れり。而して其効力は異口同音に
奏効迅速、副作用少く、水銀の及ばざる所に達すとせらるゝも、其用量は
未だ一定せず。
余の實驗に依れば體重一基瓦に對し六〇六藥一〇密瓦以上一五密瓦とす。
應用法 本品を應用する部位に依て異ふり、部位は大體別ちて三とす、

第一靜脈注射、第二筋肉注射、第三皮下注射是なり。
 靜脈注射を行ふには本品を溶解せざるべからず是にはエーリツロの推奨の下にイウエルセンは本品を殺菌水一五立方仙米に溶解し、定規苛性曹達液を加へて「アルカリ」性の證明ある帶黃綠色の液とす一〇%醋酸水にて將に潤濁せんとする迄餘剩の苛性曹達を中和す併し弱「アルカリ」性にして清潔なる液あるを要す是を肘中靜脈に徐々に注入せりアルトとシユライバーは本品〇、三を殺菌水一〇乃至二〇立方仙米に溶かし純「メチールアルコール」〇、三立方仙米を加へ定規苛性曹達水三、〇立方仙米を注ぎて證明の液とし是に殺菌水を加へて二〇〇立方仙米とて中靜脈に徐々に注入せり。
 筋肉注射及び皮下注射には本品を乳劑として應用するを得、故に乳劑を弱「アルカリ」性或は弱酸性として應用せる者ありしも近來は多くは中性乳劑とて使用するを良とす。
 シユライバーは本品を「メチールアルコール」にて濕し二〇%苛性曹達液二乃至三、〇立方仙米に溶かし「ヘノールフタレン」酒精液一滴を加へ紅色の消ゆる迄水醋酸を點滴す其餘剩は兩者の一%液にて稍中性或は弱「アルカリ」とされる乳劑あり。
 ウエクセルマンは本品を十%苛性曹達液に溶解し是に〇、二%「ヘノールフタレン」五〇%酒精溶液一二滴を加へ紅色とされるを脱色する迄一五%醋酸水を注ぎ益「ラクムス」液にて充分中性反應を呈するに至りて筋肉及び皮下注射を行へり、又ウエクセルマンは沈渣物を生理的食鹽水にて無菌的遠心器にて苛性曹達及醋酸等を洗ひて其沈渣物を皮下注射しクロマイエルは本品を一〇%流動巴刺質乳劑として筋肉注射に應用し「デウホー」は本品〇、五に「メチールアルコール」〇、五を點じ生理的食鹽水四乃至六立方仙米を加へ酸性の儘筋骨肉に注射せり。其他アルトは本品を殺菌水一〇立方仙米に攪拌し〇、一に對する約〇、五立方仙米の定規苛性曹達水を加へ約三十分

攪拌する時は透明の弱亞爾加里液を得るとし、ミハエリスは本品〇、六に殺菌水二五立方仙米を注ぎ攪拌溶解す、定規苛性曹達水六立方仙米を加へ醋酸にて中和し是に苛性曹達水を滴下して弱亞爾加里性液とて皮下に注射し、フオルクは乳劑にて乾燥的に磨し殺菌巴刺質(オレーフ油)を加へ軽く磨し尙ほ五乃至八立方仙米を注ぎ背部の皮下一二個所に注射す。又チトロンとミユルチエルは一五立方仙米入の注射器の套管端を圓錐にて止め螺旋を以て取放し得る様の注射器中に六〇六を入れ「アルコール」數滴にて濕し殺菌水五立方仙米を加へ振盪して溶解す一〇%炭酸「カルシウム」生理的食鹽水を振盪しながら四〇滴加ふる時は濃き乳劑を得全量五・六・五立方仙米也。マキシミリアン、フオン、ツアイスルは本品を純「メチールアルコール」(〇、一に對する二滴)にて濕し本品〇、三ならば十分一定規苛性曹達水五、五本品〇、四ならば七、三、本品〇、四ならば七、三、本品〇、四五から八、二三本品〇、五から九、一にして之に殺菌水五・六立方仙米を加ふ。

テীগは硝子棒と一試験管とを箱にて消毒し他の試験管に水を煮沸し先の試験管を冷して其中に六〇六薬を入れ「グリセリン」を一・二滴加へ硝子棒にて攪拌する時は冷「グリセリン」には溶けざるを以て同質性糊状物を得べし是に先に煮沸せる水を適宜に加へ攪拌する時は透明の液を得、一〇乃至二〇%として腎筋に深く一個所に注射す。又學生「バイセル」がトロイヘル教授の研究室にて行ひたる法は本品〇、五に二%葡萄糖溶液の數立方仙米を加ふれば透明の液を得、是に苛性曹達を加へ殆んど中和するに至るも證明あるのみならず濃厚なる葡萄糖溶液を應用する時は本品の酸化を防ぐ力ある故其溶液を遠隔の處に持行くも中毒障害を起す事ふしとす。

以上諸氏の方法種々多ふり雖ども皮下及び筋肉注射に於て起る副作用は局部の疼痛、浸潤、發熱、嘔氣の強弱大小、奏効の遲速にあり。余は諸氏の方法を試み以て比較するに十二月三日の皮膚科學會に於て報告

せる余の六〇六藥乳劑方法亦優逸なるを以て此處に述べれば以下の如し。
今六〇六の分子量は四〇九にして重炭酸曹達は一〇六なるを以て本品〇、
五ふらば $\frac{106}{409} \times 0.5 = 0.13 - 0.14$ 故に五%重曹水ふらば二、八方立仙米乃至
三、〇立方仙米を加ふれば殆ど中和して弱醋酸水等にて中和する手数を省
くを得、凡て殺菌的に乳鉢と乳棒にて充分磨すべし是に殺菌蒸餾水四乃至
六立方仙迷を加へ背の肩胛骨内側下縁に近く皮下に注射すべし、此乳劑は
沈澱し易く注射器を縦に持する時は注射針を閉塞するを以て振盪して直に
水平即ち横位とふし氣泡を注意して注入すべし。

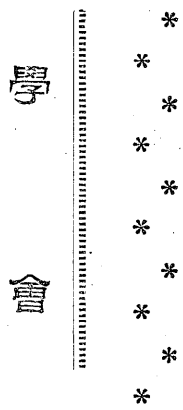
余は五%重曹水三、〇と蒸餾水六、〇を合したるものと此中に六〇六號を含
めるものとを兩側の肩胛骨内側に各注射して疼痛及び浸潤を比較するに六
〇六號を含有する部には相應の疼痛多少の浸潤あるも他方には殆んど無き
が如く微少なり是に依て之を觀れば六〇六號自ら組織を刺戟し従て多
少の浸潤は免れざる所あり、今是をウエクスセルマンの苛性曹達と醋酸とに
て中和したる乳劑に比較するに疼痛、浸潤遂に輕度なるを見たり。

余の是迄六〇六號藥にて數毒を治療せる九四例中余の乳劑法を應用して肩
胛骨内側下縁に皮下注射せるは二〇例にして

其結果を概論すれば以下の如し。

- 一、其乳劑法の簡易なること
 - 二、局部の疼痛、浸潤他の方法に比し輕少且つ發熱、嘔氣等甚だ稀なり
 - 三、皮下注射あるを以て吸收せらるること速に且つ奏効著し
 - 四、沈澱し易き故に注射針を横にして皮下に注射すべし
- 又其乳劑の保存法を須藤助教の推奨に依て試験せり是には「パラヒンア
チエトン」等を試みたる外亞硫酸曹達を應用せり是に余が六〇六乳劑（本
品〇、五に五%重曹水三、〇）に五%亞硫酸曹達水二、〇乃至四、〇即三、〇
を加へて保存する時は五日乃至一週間は變化なくして動物に對し更に中毒
作用を來さざるを經驗せり後者即保存法は尙ほ精細に研究の上述べべし。

（醫海時報抄）



● 金澤醫學會

（十二月十日）

明治四十二年始めて孤々の聲を金城の地に擧げし本會は一回は一回よりも
盛大に赴き毎回多數の講演者を見るは實に醫學界の發達とは云ひ其局にあ
る幹事諸氏の勞亦大なりと云ふべし、頃は昨年十二月十日午後三時より例
會を金澤赤十字社支部樓上に開催す、長宗我部副會長開會の辭をなし本日
の客員あるドクトル、田上清貞氏一場の講話を試み次で日程に入りぬ、今
左に其大要を録せむ。

○獨逸國と「トラホーム」
今回歸朝の氏は獨逸國に於ける眼病殊に「トラホーム」病の狀況に就きて其
實見を述べ同國に於ける「トラホーム」の少數なる原因を擧げて、國民の衛
生的思想の發達に歸し日常の諸道具生活法等大に衛生的なるを述べ、同病
の治療は嚴にして諸大學中には特に本病の爲め隔離病舎を有せるものある
を述べ有名なるポーン大學眼科學教授クント氏 (Kuntz) も同病の豫防は
唯清潔にありと稱せしは實は記憶すべき一言なりとて目下我國の同病の蔓
延に及び大に醫學者の注意を求めて降壇せられたり。

○小兒糖尿病の一例
吉尾 開 道氏
氏はプツテバフ井氏愛氏鳴氏斯氏及金澤病院に於ける糖尿病を年齢的
に調査せる詳表を掲げ次で同氏が有せし一例に就きての所見を述べ入院治

療の結果糖の%大に減じ退院せしが其後再び病院を訪れし時は發熱あり再び糖の排泄量増加せり然し發熱は暫時にして消退せりさて一般小兒糖尿病の豫後及原因を述べて降壇せられたり、同氏の患者は年齡八歳にして尿の比重一・三〇尿中蛋白及糖を証明し藥品には「ジャンプルシード」阿片末を用ひ食物はカルトフェル、牛乳等を用ひたりと。

(討論)佐々木教授、年齡及發熱の原因等を正し小兒糖尿病の興味ある問題ある事を述べ成書にある如く本病は直に是を我國人に適用し難く現に嘔吐のみを訴へ來りし三例の患者を有せり又男女の性に付いては男子に多きとも限らず生活状態にても下流社會に本病の多くを實驗するを徴せば本病の診斷は検査法の如何によるものにして哺乳兒にも尙ほ本病の存在を認む殊に本例にては熱性糖尿病からざりしかと。

岡本京太郎氏、小兒の尿中に糖分の表はるゝは屢次にして單に尿中の糖を以て本病と診斷するを得ず則症候的の糖尿ふるものあり故に注意すべく腦及腸の疾患日射病にも糖尿來り治病後尙糖を証明する事ありと。

米村吉太郎氏、腎臓炎に蛋白質を興ふる如く糖尿病に糖分を興ふるは理の如く思はる然るに治病上反て是を去るは如何。

佐々木教授、そは糖を興ゆる時は益々糖の排泄を増加する故に興へざるを可とす。

辰巳軍醫、予は一奇談を耳にせり重症の一糖尿患者が攝食療法に飽きて種々の食物を攝取せしに治癒せる事ありと。

佐々木教授、同一の食物を用ゆる時は糖の排泄を減ずるは事實より然し混合食は不良の結果を見る。

辰巳軍醫、予の例にては醫師の禁ぜし食品を飽食せしものありと。

○鞏皮病の患者供覽

田中一次郎氏

二十二歳の婦人本年三月頃より左下肢の浮腫強硬の感を發し漸時臀部大腿下腿の屈側赤色を呈し皮膚は硬くなり次で左の上肢にも波及せり本年八月分産後も腹部膨滿の感を殘せり然るに近日來院左肩胛、左腰部にも皮膚の鞏皮狀を呈せるを發見せり仍て下平クリツニツクに於て鞏皮病と診斷せり本病との鑑別を要するは色素性鞏皮症癩癧、癩病限局性皮膚浮腫、浮腫性象皮症等にして原因は一定せず血管及神經の障礙と云ひ寒冷は誘因とある事多し療法は強壯療法を施し局部に合併する諸症狀には其手當を要すとて患者を供覽せられたり。

(追加)飯森益太郎氏、本病の二例を實驗せりさて其二例を追加せられたり。

下平教授、三例の實驗中二例迄女性一例は男子ふりきとて女性に多き事を述べらる。

下平教授

○外科的消毒法に就て

教授は消毒を術者の手と手術の場所とに分ちて述べて曰く彼のリースター氏の空氣傳染説以來外科的消毒法の數は非常に多く術者の手に對する消毒法としてはキユメル氏の温水と石鹼使用を始めとして消毒藥の應用ありフユールプリンゲル氏が石鹼洗滌に次で酒精を用ひ後昇永等の消毒藥液中に手を浸す事を實用し、アルフェルド氏は酒精のみを用ひてベルライン氏は皮膚の硬化に基きて細菌の表出を防ぐにより消毒の目的を達し得る事を稱せり、チユリンゲンのブルンス氏は九十九%の酒精にて消毒しベルンのコツヘル先生は石鹼使用後六〇—七〇%の酒精を滴下しつゝ消毒し後昇永水を加らしつゝ五分間の消毒後護護手袋を用ひて手術をなすを例としテイレルライヒは「カウダニン」なるものを使用し、細菌的には酒精のみよりは酒精に「エテル」又は更に〇、五%の硝酸を混ぜし方有効なる事をシユンブル氏が立證せり、ヘルフ氏は二分の酒精に一分のアセトンに混じり又酒精に一分の「フォルマリン」を加へても良ろしく彼のプレスラウのミクリツツ氏

及ゴットスタイン氏は加里石鹼精を用ひつゝあり、手術の場所に對しては近來沃度丁幾を滴らしつゝ消毒を行ふ方も用ゐらるゝに至れりベルンにては温水と石鹼にて消毒し後エテール、及酒精にて掃拭する方行はれ其際用ゆる刷毛も一々消毒せるものを用ゆ要するに種々の方法あるもカイク、フライにするには可成丁寧なる消毒法を行ふ事其目的に近きものからむかひて約一時間餘に渡りて意見を述べられたり。

(追加)長宗我部副會長、吾人が目下行ひつゝある消毒法は比較的の消毒にして絶對的に非ず故に消毒を嚴にせし部分にも尙ほ細菌を培養し得と述べ、酒精消毒法は日露の戦役に於て大に實驗して有効なるを認めたり要するに消毒は種々の方法ありと雖も自己の信ずる方法によりて充分なる消毒を施せば蓋し可からむ。

時將に七時四隣に響く木枯しの聲、窓打つ聲の音、隙もる風は斬るが如く轉た年の暮れの淋感を起さしむ、長宗我部副會長閉會を告げ各自小套に身を固めつゝ暗を犯して家路に辿りぬ、當日、新入會員數多及學生の聽講も多數ありて何時にあき盛會ありき。(文責は記者にあり。福田記)

* * * * *

通信

●生沼曹六氏の通信

(松原教授宛)

月沈原に御送附の十全會雜誌當地に轉送され確に落手仕候、久々に母校の近狀を知り愉快に存候小生月沈原に轉學の考ありしも故ありて宛大學に

(通信)

改め來春三四月頃迄當地滞在の考に御座候、同窓諸兄によろしく。

●田上清貞氏通信

(松原教授宛十一月二十九日著)

十一月三日午後伯林に入り其夜大使館に於ける天長節の佳辰に列り久々に御尊影を拜し奉り感激實に深かりき出席するもの百五十名の多數にて珍田大使は嚴肅なる語を以て曰く本年の佳辰は日出度きが上にも實に日出度し其は朝鮮二千万の民亦此佳辰に浴するを予の外國にありて此辭を聽き眞に感銘に堪へざりき御承知の通り伯林はさすが學術淵藪の地にして其中心点たり博物館のみにて二十六個所あり從つて見學すべき事件々に多し予は醫科大學の眼科にグレーフェ先生を訪ふ事三回懇に教示され手術かども見たりウイルヒヨ博物館の病理標本の陳列整然として幾多珍貴にして有益の標本あるにさすがに驚きぬ、ウイルヒヨ大學病院は市外に近き地であり二千の患者を收容し各科の設けありて其規模の大なるは予の昨秋見物せしハンブルグ市の「エツペン、トルフ」病院と見たり難く弟たし、予は想ひぬ、日本にいつかゝる完全なる病院が設立せらるゝにやと嗚呼吾人等奮起すべし。愈々歸朝は迫まりぬ出來得べくは尙ほ何年でも居たき心地分するも世の中は思ふまゝに行くものにあらず予は今夜伯林フリードリッヒ停車場を發し歸途に上らん何れ樂しき拜眉を得るの期あらん、高安先生によろしく諸先生にも何卒、加藤學兄、田中一次郎兄、深美兄、福田君にもよろしく御傳聲を乞ふ。

明治四十三年十一月十四日午後五時

伯林にて、田上生

●小山田基氏通信

(松原教授宛)

平素は多忙に取紛れ御無音に打過ぎ何卒御海容被遊度候十全會雜誌御送り

被下難有存候歸宿所勞の夜半は殊に嬉敷繰返し披見仕り居り候歲月流るゝが如く鳥兔匆々渡歐以來已に一年越はしも些の進歩も無之汗顔の至りに不堪候、去年十月末より産婦人科にありしアデルライン及びアマン教授の指導を受けつゝ、傍ら病理教室に作業中にて異域の孤客としては比較的幸福に月日を過し居り申候御承知の通り當病理教室は一昨年ホーリッガー教授の物故せられし以來腫瘍の研究に造詣深きホルスト博士來たりて主管し次に先代よりのレスレー博士助教授として共に教鞭を取られ居り小生は當教室には主としてレスレー教授の薰陶を受け居り候大阪の田中祐吉君も昨冬期より茲に研究中に御座候産科はウインケル教授退任職先年デーデルライン教授チエーベンゲンより來たり手術は尤も名ある人に候婦人科は専らアマン教授の支配に屬し居り候同博士は病理の蘊蓄深く稀有の「アレバラート」貯藏家に候小生は僥倖にも同氏の知遇に浴し「クリニツク」は勿論氏の住所たる赤十字社にも毎週二回づゝ參り他の助手等と共に大小手術及び治療上は殆ど同様に行ひ得可き地位にあるを喜び居り候元來獨乙の大學は外國人にかゝる例は甚だ乏しく多くは傍觀する位の者の由を聞き居りし事さて一層此の厚遇を得て細心過失ならん事を心懸け居り候材料の如きは甚だ豊富の者にて日々大小十五六の手術は少くとも之有り候如此状態の下に當分小生は此の地に覺束なき理想見かけて蝸牛の歩を運ぶ可き考に御座候。

本邦留學生の多數は無論故國にありて相應の素養を積まれし士に可有之候へ共所謂アルバイト熟にのみ吸々として實驗治療上に於ける觀察に甚だ冷淡ふるは嘆かばしき事と存じ候苟も脈を握り刀を取る身の作業の其れに對峙して忽にすべからざる事は識者の再考に價する簡條を存じ候當民賢は吾が十全會には殊に關係深く前年榮譽を擲はれし飯森、橋本の両ドクトル過日錦を飾りて歸朝の途に就かれし田上清貞君瑞西に開托して歸途暫く足を止められしドクトル河合賢君松原博士下平教授の來訪せられし處現時は日

野松久兩君及び小生の三点に御座候へ共客秋東亞の風雲暗れて已に資格同題の解決せられし今日殊に精神病のクレペリン生理のフランク昇床食糧誌のアンゲレル衛生のグルーパー内科のシュツレル小兒科のバウンドラー組織のモリエ等代表的大家の繁集の地追て我が同窓諸兄の笈を貰ひ給ふの士を迎ふる事と存候繼て故國山水明眉の高臺に築かれし我が十全會は新たに多大の實驗と幾多の業績を擡らせられし下平教授を迎ひて益々活動の域に隆盛の期に向はせられ候事と信じ申候右年頭の祝詞旁近況申上度余は期永陽候早尙小生は去る十月より左記の處に轉宿仕り候

Dr. M. Oyama

bei Frau Wolff

Daisenstrasse 13 / e

München.

●加藤錠吉氏通信

(福田美明氏宛)

拜呈先日は御芳墨難有候、追々寒氣相加はり候處益々御多詳慶賀の至りに存候定めし御地は日本海の寒風日々雪を携へ來る事と存候當地は至て天候宜敷雨さへ未だ一二回見たるに過ぎず候近頃長靴の用もふく、歳の暮に際し何れへか臨時用途にてもせば宜敷かと思ひ居り候併し空氣は至て不潔塵芥と煤煙にて白き洗濯物も知らぬ間に汚染せられ候其他當地の状況に就ては別段御報知申上ぐる程も御座ふく、津太が臺灣の僻地へても參れば却て御報道の材料も多々有之べく候へ共當地の如きは何人も御存知の如くにして今更申上ぐる事皆目無之候

當病院には三十七年母校出身の仙波昌秋氏が在職せられ職重隊の太田勘市氏は只今軍醫學校入校中にて來る一月下旬には歸阪せらるべく斯くすれば母校を語るべき人も出來御存知の通快活なる風姿に接し得ること、楽しみ居り

候、當地の第八聯隊には同期の卒業生大隅惠君只今勤務演習の爲め入隊勤務致され候又本年の藥學科出身の御影君は本月上旬見習藥劑官として當地の歩三七へ入隊せられ候。當地も一寸市外へ出掛け候はゞ色々と見るべき所や遊ぶ所も有之若し趣味ある所も見出し候はゞ御報可申候時下御自愛專一に可被遊候早々

大阪市東區島町一ノ一四早川方 加藤 錠 吉

* * * * *

内地雜報

○醫師の増加

本邦の人口に割當て、醫師の需用及び供給に關する確たる標準は未定なるも、一昨四十二年の調査によれば、醫師一人に對し、人口千二百六十四名の割合ありしが、爾來各醫育機關の整頓と増加とにより、昨年度に於て醫師たる資格を享有せしもの、(登録は不明)實に千七百八十八人の割増を見るに至れり、即ち

- 各醫科大學卒業 ● 二九九名
- △東京 一二七名 △京都 七九名 △福岡 九四名
- 各專門學校卒業 ● 一、〇〇四名
- △千葉 一一一名 △仙臺 一〇五名 △金澤 九九名
- △岡山 一〇九名 △長崎 九三名 △大阪 八八名

(内地雜報)

- △京都 一〇八名 △愛知 一二一名 △熊本 六六名
- △慈惠院 一〇四名
- 醫術開業試驗及第者 ● 四八五名

以上の如くにして、昨年より約三百餘名の劇増はり、然るに昨四十三年度に(十一月十五日までの分)内務省醫籍より除去せられたるものは、千百七十餘名にて差引約六百餘名の増加なり、即ち醫籍除去者は一昨四十二年よりも約百名近く増加し居れるに拘らず猶且約二割五分餘の醫師増率を示せり。尤も新領土たる朝鮮の人口に割當る時は(朝鮮には醫者の無きものと見て)尙ほ此上如何に多數の醫師出づるも差支ふきのみならず、如斯は國家政策の上に於て、利益なるも、若し新開業者内地に偏せば生活難の聲は、勢ひ免れざるに至るべし。更に本年は昨年より以上の學校卒業者を出すべく、三醫科大學にて三百十人其他、各醫専校より千二百人の卒業者を出すべく、此上昨年の標準を以てせば、文部開業試験の内よりも五百内外を出すべく、今日の處ろ約二千名の同業者は年々新に社會に出でつゝある有様あり。(醫海時報抄)

* * * * *

醫校雜報

●各所の新事業

(其一) 文部省所管

三三

●●●東京醫科大學●●●

東京醫科大學は來五十年迄の繼續事業として各種の擴張をなす筈あるが、此内本年度は六萬五千六百八拾圓を支出して、一棟三十六人を收容する内科病室二棟、洗濯所一棟、三百名を容るゝ看護婦寄宿舎一棟、精神病外來患者診察所及疑似癩患者診察所の新築に着手する筈にて、右の内本年度内に落成するは、内科病室と精神及癩患者診察所なり。

▲京都醫科大學▲

京都醫科大學は眼科及産婦人科の療室及精神病外來診察所を前年來増築しつつあるが、本年度も引續き工事を進め本年度内に落成せしむる筈なり。

▲福岡醫科大學▲

同學は前年來繼續事業たる精神病教室の新築及寄宿舎の一部新築に着手する筈にして、寄宿舎新築費は六萬餘圓あり、此他傳染病室の擴張をなし、尙整形外科講座新設の爲め其設備費壹萬圓を支出する筈なり、同學は本年一月一日より獨立したる九州帝國大學の一分科となりたるが、今日迄は京都大學より毎年貳拾餘萬圓の分與を受け居りしも今後は従前よりも四萬圓を増さるゝ事とあり、之に病院収入を加へ總計四拾餘萬圓にて一ヶ年の經費とする事となりたり。

▲各官立醫學專門學校▲

六官立醫學專門學校は、何れも政府支出額約七萬五、六千圓あるが、單り岡山醫專は藥學科の設置なき故に他校よりも五千圓少し。即ち岡山の本年度歳出入豫算は、經常隨事部を合して五萬三千餘圓にして特記すべき新事業あるなし。千葉醫專は昨年度の解剖標本室増築、細菌學實習室増築等の落成の爲め本年度は其設備費若干を要する筈あるが、極めて少額あり。同校の附屬たる縣立病院は、政府及縣支出額を合し、拾參萬九百餘圓の經費となり居れり。仙臺醫專も千葉と大差なし。唯だ同校の縣支出額は前年より多少増加すべし。尙同校の前年度よりの繼續事業たりし臨床講義室五棟

の新築工事は四十三年度内即ち來三月下旬に落成の筈にして此費額十四萬圓あり。金澤醫專は前年來の繼續事業たる校舎改築の臨時費一部を本年度内に要求する筈ありしも、前年着手せし工事豫定通りに進捗せず、殘工事あるを以つて本年度は右の繼續費を要求せず、翌年度に延期する事とあり、既に着手せる本館、生理、衛生、藥物、病理、法醫學の各教室新築工事と本年中に落成せしむる筈あり。長崎醫專の豫算は八萬餘圓にして、本年度の新事業は、圖書閱覽室、醫化學教官室、細菌學附屬消毒室、動物小屋、植物溫室等の新築、藥物教室増築、寄宿舎大修繕等にして此經費四萬六千圓ありと。又新潟醫專は本年度内に各教室の落成を見る筈あるも、目下の處にては覺束なく、全部の完成を見るは明年度ならん、尙病院一部の改築も本年度内に着手する豫定なれど、議會の協賛を得るや否やが多少心配なり。

（其二） 公私立醫學專門學校

▲愛知醫學專門學校▲

同校は、校舎及病院を前年度より、五十六萬四千九百六十餘圓を以て、建築中にて、本年度中（明年三月末迄）には竣成の見込みあるも、工事進捗と共に豫定の額にては竣成覺束かゝるべく、尙更らに拾餘萬圓を追加として要求するに至るべし、而して學校及病院の歳出入は、

一、拾八萬四千四百四拾餘圓

歳入經常部

一、拾七萬四百貳拾餘圓

歳出經常部

の見込あれば一ヶ年壹萬餘圓の収益ある事となり居れり、又臨時部としては、校舎改築費として四十四年に支出すべき額參拾貳萬五千五百參拾圓ありと。

▲京都醫學專門學校▲

同校は、本年度起すべき新事業少からず、其内主なるものは、内科及び産婦人科の診察室及治療室、研究室の新築、此の豫算貳萬六千八百四十餘圓、

其他消毒乾燥室、標本製造室、藥局及附屬室、患者娛樂室、給水電燈排水等の諸工事にして總經費五萬百餘圓あり。尙前年來の新營工事にして本年度内に落成すべきものは左の如し。

- 一、眼科小兒科診察室 六月落成
- 一、參及四等病室 七月落成
- 一、内科產婦人科診察室及治療室、藥局 十月落成
- 一、患者娛樂室 十二月落成
- 一、標本製造室、消毒乾燥室、給水電燈其他の諸工事 四十五年三月末落成

又、本年度の本校及府立病院豫算は
一、廿五萬五千八百五十餘圓 歳入經常部
一、廿貳萬七百五十餘圓 歳出經常部
にして參萬五千百餘圓收入殘金ある豫算あり、臨時部は前記の如く五萬百餘圓あり。

▲大阪高等醫學校

同校は、本年度に於て學校に屬する諸建造物全部の新築改造の完了を急がんと爲め、又本校豫科に專任の獨語高級教師及一人の獨語教授を増聘することの事也、諸器具機關費の爲めに收支豫算に於て、實に五拾萬圓を計上せり。尙ほ此他遺外教授の歸朝者等の爲め、更に新規諸器械器具の需用あるべく、此爲め約拾餘萬圓の増支出を見らるべく、各病室等の完成と共に、學用患者増收の企てもあり、多年佐多校長が計劃せし我醫科大學よりも其の實質に付ては、優に超越せしめんとの理想は、やがて事實さるべし、且つ多年研究中ありし、二年の豫科を、更に新高等中學校令に鑑み、半ヶ年を延長すべきやに付き目下研究中ありと。

▲熊本醫學專門學校

同校は昨年來校舎の建築に着手したるが、其の内耳鼻咽喉科の診察及研究

(醫校雜報)

室、二三等病室各一棟は、(此の費額貳萬餘圓)本年度に於て落成を告ぐべく衛生學、細菌學、病理學、解剖學の各教室増新建築の分は、本年十二月中に全部落成の豫定あり。尙ほ精神科診察所、同研究所一棟、病室一棟は壹萬參千餘圓にて、本年度より建築に着手す。醫專校及病院の歳出入は、經常費拾六萬九千五百餘圓にして臨時費として移轉其他新築に要すべきもの八萬貳千餘圓を計上せり。而して縣病院の歳出入は、昨年度に比し、八千餘圓の増加あるも、臨時部繰越金縣費補助金に於て前年度の繰越八千餘圓を餘せるに由り、臨時小起工費は圓滑に融通し得る由。

▲私立東京慈惠醫學專門學校

同校は昨年來建築中ありし病理及細菌學教室完成して、今月より使用する事さるれり、又同校附屬たる慈惠病院は從來收容患者數百四十名ありしを本年より四十名を増加し、百八十名とする筈にして之が爲め多少の經費を増加すべしと。

(其二) 臺灣總督府

同地の醫學校は生徒收容數を百名に増加せし結果校舎取擴げの必要あり、前年來増築中あるが、本年は約九萬圓を投じ豫定の擴張工事を進捗せしむる筈、又豫て調査中ありし熱帯病學研究費を請求する筈ありしも本年度に見合す事とされり。

(其四) 大連醫院

同院の本年度收支豫算は、支出五拾萬圓、收入貳拾參萬圓にして、昨年來着手せる瓦房店、鐵嶺、長春の三分院に於ける婦人病室、遼陽、安東縣の二分院に於ける傳染病室、安東分院の普通病室、遼陽、長春、安東縣の各分院の本館新築、開原、鷄冠山、本溪湖の三出張所の新築等は、本年も繼續費を支出して、本年度内に落成せしむる筈にて此經費臨時費として約五拾萬圓あり。此他に本年度に於ては病院の新築、醫學校開設等を実行すべく計畫せられ居れども、其經費は尙未定ありといふ。

(其五) 朝鮮總督府

朝鮮總督府醫院附屬の醫學校は、朝鮮政府時代に擴張に決し、種々増築等
なふし居りしを、合邦後一時見合せとなり居りしが、醫學校は従前通りに
經營する事さふりて、以前の計畫を引續き續行すべく各種の増築等を行ふ
由。(醫海時報抄)

* * * * *

校内雜報

●講話部例会記事

(十一月十九日)

十一月十九日午後於濟々堂本學期第一回講話部例會は開かれたり、連日來の
積雲漸く散したりと雖も戸室醫王の谿間には既に皓として白雪を埋め寒風
凜然として膚を裂く
午後二時開會の幕は轟々たる拍手の下に鬼頭部長により演せられたり當日
の出演如左

▲辭郷の感

高橋 邦次 郎君

先づ家庭及社會上の感に兩別し家庭上の感としては親子の情切にして譬ふ
るふきを語り社會上の感としては自身は父母の愛子として膝下に嬉々たり
し子供心の尙失せやらぬに世人は已に大人を以て遇するに驚き在郷先輩同
學の失敗談を聞くに就き醫は利あるもの福あるものちう空想の今は一陣の
夢たりしを嘆じ縷々盡き難き歸郷の温情を述べられたり蓋し此感やたゞに

氏のみ非ざるべし。

▲健 康

松 江 常 行君

君や實に紅顔の美青年然れども一度閉口すれば湧然として盡きざる事泉の
如し健康の身体に健全の精神宿るとの金言を前提し況日發行萬朝報記載
「大事業と体格及年齢の關係に就て」の一節を朗讀し本邦人の早熟を難し軀
幹の短小必ずしも憂ふるに足らざるを論破し例を「アレキサンダー」及「ナポ
レオン」に求め最後に演者が過去五年に於ける唯一の健康法として冷水摩
擦の實行を推薦し本法の生理的効果及用法を詳述し切に吾人の實踐を勧誘
せらる。

▲雄辨家さふるの法

松 井 啓君

辨の優劣は辨の巧拙に依らざるを論じ所謂眞の雄辨家たらんを欲せんには
人格及學識修養の主眼たるを讀き松原三郎及三宅雪嶺兩博士の啗辨長く世
人を感動せしむるもの一に上記の理に因するを立證し更に雄辨の定義を下
して曰く雄辨とは演者の「インスピレーション」が能く聴衆の肺腑を貫通し
永久彼等をして忘るゝふからしむるに在りて局を結ばれたり。

▲「アミーバ」赤痢の一例

特別會員 中村欣一 郎君

赤痢の病源及其一般的症候を説述し次に熱帯赤痢と温帯赤痢との症候上の
異なる点を長く指摘し進て氏の日頃偶然遭遇せられたる「アミーバ」赤痢の
一好例に就て其既往の來歴現症經過及療法に付き篤篤に説明を興へ最後に
アミーバト大腸菌との鑑別すべき件々を詳細に論斷し氏が切なる研究によ
る氏獨特の染色及固定法に就き教示せられたり。

記者曰先に佐々木内科に在て異群を放たれたる氏は今春出て、櫻木病院
に榮轉せられ専ら斯學の爲め研磨せらる此日喉頭カッターにて嚥頭ある
に係らず我々後輩を益せんがため多忙の院務を愉て出演の勞をさられた
るは吾人の深く感謝する所ふり希くは自重あらんとを。

▲産婆に就て

鬼 頭 教 授

豫定の出演者都合上欠席のため飛入りに部長の御講演を余儀なくせり講話の要点は、現今用ひられつゝある産婆の種類、社會に於ける新産婆と舊産婆との地位の比較、産婆の教育上の希望、に就て述べられ尙ほ社會一般に對しては舊習を打破して少しの費用を厭はず新教育ある經驗にさめる助産婦を求め妊娠中は専門醫の診察を受け分娩時には専門醫の監督を受ける様希望す次で金澤病院に於ける分娩数の少ふきは世人の誤解に因るからんか若し然らば此れを除かしめたく特に學生諸君に望むと述べらる。

▲歐洲雜觀

下平教授

待ち兼ねたる聽者を満足せしむ可く例の温顔に笑みをたゞいで演壇に立たれたる教授は久しき留學中十全會に疎遠なりしを謝せられ次いで本題に入り更に後日を期し本日は其一總論として一時間余に亘る講話ありき明治三十九年十二月二十三日放山を辭してより四ヶ年を経たる前月十七日敦賀に歸着せり其間殆んど瑞西國ベルンにありき留學前既に瑞西と決心せる次第あり、瑞西は人口三百萬餘言語は主に獨乙語を用ひ其他佛國語及び伊太利語用ひらる、全國を通じて人智の進歩交通機關の發達せる事は豫想外あり大學は全國に六個ありベルン、チューリッホ、バアセル、フライブルグ、ロザン、ゲンフ、全國は二十三のカントーレン、に分たれベルンカントーレンは人口六十萬大學は多く此地に在り學生は自國人よりも他國人多く就中露國人多し殊に女子は三分の二を占め恰も女學校の如き觀ありきベルンの大學には醫學大家として外科にコツヘル氏、内科にザアリ氏、皮膚病學にはヤダスソソ氏、病理にラングハン氏、細菌學にコルデル氏等高名の人多し四十二年八月下旬アレツテル、に開かれたる第二回萬國外科學會に出席し歸路三週間の旅行をふし南獨乙の諸大學を參觀せり昨年夏期はベルゲンに開かれたる萬國癩病學會に臨みたり同會はハンセン氏の名譽のために催されたるものにて頗る盛大なるものありき同會は癩病には有力なる療法ありしと結論せりと述べらる。

▲偶感

高安校長

何人も事物によく注意を拂ふ事の必要あるを口にするも其實行は難きものなりと述べられ醫者特に學生に就て懇切に注意の必要を論ぜられ學科修養上の良策を授けらる、時既に燈火を要したればにや講話は短時間よりき然れども生徒の得る所は多大かりしを信ず。

▲閉會の辭

鬼頭部長

右にて此回の會畢る時に午後六時半、かくて四十三年最終の講話會は吾人を辭しぬ、されども會は永劫無窮なり吾人は來ん年更に偉大なる姿して汝の現はれ來るを待つや切あり。

エム、アイ生

●野球部の設立就て

這度新たに十全會野球部が設立されたに就て貴重なる餘白を籍りて一言本部の沿革を述べ度いと思ふ。

抑も目今我が學生界に於ける一大風潮として野球趣味の普及と云ふものは著しい處であつて、有らゆる階級に亘り何處の校として其部の設立を見、かゝるものは少なく而かも其校各種の運動界に於ける霸權を掌握して居るの否も可らざる事實である。そこで野球技の何物たる價値の奈邊に在るは暫くたゞ由來本校には運動史上未だ嘗て野球史に筆を染められなかつたこと云ふのは是れ校の事情上不得止の次第とはいへ是迄幾度か心ある士の慨歎して止まらなかつた處である。

北陸の地は天候濕潤の事多く戸外の運動は不尠不便である、然し乍ら優に一年の半は青天井の下、原頭に嘯いて浩然の氣を養ひ得るのである、即ち青年に對する天の配劑である、若も之を敢てせずして蟄居屏息に暮して了ふらばかの尊むべき青年の元氣は失せ果て、實に隣むべきものに歸するであらう。茲に於てか本校にても時世の要求に伴ふ多数の希望を容れ

られて念本校設立の機運に到達した所以である。

觀れば本年の正月であつた、校内有志者は本校運動界を賑はし、兼て之と重大の關係ある生徒の氣風を振興し度い希望を抱いて新たに醫事校野球團なるものを組織する事を認可され不肖の身を以て代表者たる職を耻しめ、當時團員は僅かに十餘名は過ぎなかつたが、奈程かして北陸運動界に雄々しい鹿島立をして本校の名聲を擧げ度いと云ふ希心勃々としてまだ二二月の寒空に僅かの晴れ間を求めては雪を掻いて練習をした。

春うらゝかある一日、M.A.のマークを胸に飾つた本校建兄が四高グラウンドに顯れた時は如何に吾等の心を跳らしたか。先づ陣頭の驢に工業軍を屠り幸先よと心に祝ふや、次で斯界の群雄商業、二中、一中、筆鋒を揃へて我に戦を排み來つたが何れも雖も零碎を以て確倒した、殊に永く縣下の覇を稱へ來つた一中軍は健氣にも倦土重來したが、○再度の零碎に全く手を空しうせしめた、斯くて愈々我は四高軍と陣を對して、彼は斯界の老大、歴史に於ても練習に於ても、はた、技術に於ても一日の兄である、こは云へ愛校のベストの向ふ處何物かあらんやで再戦我に利在あらずと雖常にクロスゲームを以て危く勝を讓つたに過ぎない。而かも此高對醫試合は非常な人氣で觀客實に其都度萬を以て數ふべく金澤始まつての景氣であるそうである。

思ふに、微力團員にして意外にも斯る大を成し得たと云ふのは畢竟校内の多大の後援が以て然らしめたる所以である、殊に其創設と共に殆ど模範的として江湖の賞賛を博した本校應援團の偉大なる活動は興つて力ありしと云はればならぬ、一度び少數團員の負擔に係る處の經費不足を告げ及ぼしては原動力を殺がれんとするを見るや、全校學つて寄附金を投ぜられ以後願の憂ひからしめたる如きは團員一同の深く感奮した處であつて、茲に一同を代表して滿腔の感謝を呈する次第である。

斯くして吾校の野球は益々發展の域に向ひ従つて少數者の專有を許され

ざるに至つたのみか、又經費負擔の上に於ても少數者を以てして此大野球部を支へ能はざるに立至り、今や十全會に編入される事さつたのである、此の編入に關しても各教授の御賛同各部委員諸氏の犠牲的同情併せて一般生徒諸君の熱誠に基くものであつて決して偶然でないのは是れ吾人が本校野球史の第一頁に特筆大書して永く紀したい所以である。

終りに臨み特に一言して置きたいのは、かの野球團なるものは十全會野球部設立と共に所有器具の全部を擧げて之に寄附し全々解散して了つたのであつて本部とは何等の關係もふいのである、隨つて、本部の消長は偏に全校生徒の双肩に在る處であるが故に、新たに勃興したる校風發輝の絶好機會たる本部の前途に對し善く諸君の慎重なる注意を煩はしたい所以である。

(廣瀬生)

● 野球戰の印象

よく晴れたが、と思つて、出羽町練兵場の方へ行つた。新坂の方へ寄つた方向に暮がひいてあつて、黒い人塊が見ゆる。つい廣坂で道草を食つて、遅くあつては、來て見ると思はれた人に對して面白くないと思出して、時計を見るさ一時だいな廻つてゐる。だがまだ始まつてる様子もないので、安心してポカリポカリと歩く。練兵場には草が生へてゐる。青い空にだまされて、何気なくその上をゆくさ、草の下から、ジメジメしたぬかるみが、ニエーツと出て、無難にも僕の下駄を吸ふ。美しい着物の裾が濡れてるやうで、斯うきつぱりさ晴れた、空の日光に對して、この泥濘は、まことに不調和だと思つた。しかし、天氣に對して理屈を言ふのはすぐ忘れて、僕は南の方の暮へうつと辿りついた。直角に廻してある暮の真中にテーパールが一つ、その前に、小さい海軍旗のやうでまたまた立派な優勝旗が凜として立つてゐる。東の方の暮の前には椅子が並んで、それへあまり多から

ざる人数が掛けてゐる。

主に醫學科の方だ、こちらの幕障の薄縁の上に、主に藥學科の人があぐらをかいてゐる。僕は其あぐらの中へヒョッコリお仲間入した譯だ。

練習戦が始まる。追々見る人も加はつて来る。熱心に僕も見た。残念にも僕は勝負が分らぬ。勝負が分らんでも見てゐて面白い。西洋人が話してゐるのに遇ふと、僕はよく立止まつて聞く。聞いて分るのではないけれど、そんな立話でも、人間の自然のヂエスチユアが表はれて、それが反應し合ふのが面白いのだ。野球では、人間が如何にも痛快に動くてはふいか。練習戦が數回か試みられた。日がかげつて、秋風が強く吹き始めた。

可なり冷たい。向ふの椅子の連中は、日光の直射の代りに今度は風のた見舞を受けて、僕の近眼にも寒そうお顔がすーつと映る。しかし、僕の方でも暖くはふい。後ろの幕が、疾風を負つた帆のやうに、僕の肩岬部から上をいやさいふほど壓へつける。たまたまふくまつて前へのし出た。一寸斷はつて置くが、この言葉を抑山と思ふ人は考へて見るがよい。世に軟いもの位、力の痛切に働くものが他にあらふか。ぐつとやつてくるものには抵抗の仕様がある。そつと來て、また、そつと引上げるものに對しては忍耐の仕様がよい。

僕のみに負けるものは少い。こゝが混れば混る程、抵抗力が稀薄にふる譯だ。前出ても、風は依然として烈しい。羽織さ、縮込さ、襦袢さは通して、冷たい風の手が背中肌を一面にさつと撫でる。秋だか！さいふ感じを僕は全身で感じた。本試合が始まつてからは、僕の筋肉はあたまかく緊縮した。赤い帽子さ、白い帽子が代る代るカラウンドに動いた。殆んど空氣の抵抗すらもさいやうに、輕快に動いた。僕は何か忘れてゐたことを思ひ出したやうに、ちつとそれに見入つた。からだを横にして、丁度西風にさらされた落葉が戸障子の中へ吹き込むといつた風に、ホームや、フハーストに辿り込むのもある。うすい運動シャツが、一重たゞ肌の上に

幕狀に垂れてゐるピツチャーの痛快な姿などもあつた。しかし、他に自分はある事を思つてゐたのであらう。それは、早く少年の時に忘れて來てしまつてゐる「運動の喜び」さでもないふやうなものである。「よー」「……………」といふ、高調子な、記憶し難いゲロイシユが僕の横の方から起る。藥學の方で彌次なのだ。勝つやうで、負けるやうで、僕はこの歡聲の意味を解するこゝが出来なかつた。が、「人を笑はせる」といふのを、たしかに嘆息の言葉さ聞いた。だんだん終にあつて、既う勝負も決つた、さいふやうな失望の色が藥學の方に見えた。どうせ、内輪同士ふんだ。

藥學の方も負けなければいゝがと思つてた。勝敗の數は、しかし、極めて平凡に判然した。愈々、試合が終へて、座を立つて、テーパーの方へ進んで行つたとき、「どつちが勝つたんだらう」、と先から僕は憶却ふ爲めにしまつて置いた問ひを、そこに立つてゐたA君に向つて發した。もしA君が、始めからこの試合を見てゐたのだつたら、一寸この問ひに驚いたかも知れなかつたらふが、そうではなかつたらしく、A君は、僕と殆んど同じ機を調子で、首を傾げて、「醫學科の方が勝つたがやらう」、と言つた。僕は斯くして今日の試合の勝負を知り得たのである。

皆、ざるざるさ、優勝旗の方へ寄つて來た。もう、藥學醫學の區別はふい。十分前まで勝負を争つた風はどこにも見ぬかかつた。それ丈、兩方の親しみが濃かつたのである。醫學科の方から、馬詰君が出て、校長さんから優勝旗をいだいた。部長の脇坂先生の發聲で、金澤醫學專門學校野球部萬歳を三唱した。これで、今日の試合も目出度終つたのである。廣瀬君が、顔の裏でこゝこしてゐる。延びに延びて心配した天氣も晴れ、こんふ満足な結果を見得たのであるもの。僕もうれしさを禁じ得なかつた。すぐ僕は公園の方へ向つた。秋深い小立野の空にはもう夕風が吹いてゐた。

(T F)

(校內雜報)

一等 八島先生 二等 佐復先生 三等 影山先生
 なり終りて當日第一の見物ふる三人殺しの紅白勝負は開かれたり一番は一番と勇しく戦ふ或は二人射殺して戦死する者或は一戦にて戦場の露さふる者ありて愉快ふりき然して能く三人を射て名譽の月冠を得恰も東郷大將の如く迎へられたるは左氏あり

岩田氏

時將に暮色四邊を拂ふて夕暮の鐘かすかり斯に本年秋期大會は終結をふしたりき。

●田上清真氏歸朝歡迎會

(十二月十日)

萬里の波濤を踏破し、ドクトル、メヂチ子の榮位を擔ふて去月二十九日郷里富山に歸朝せられし氏は十二月十日親しく母校に臨みて師及學友に永々の握手をふすべく出澤の豫報を學兄松原教授に致せるに急卒の間一會を催して舊情を温めんもの深美貞之助、田中正一、田中一次郎、松原博士等發起とあり金澤醫學會終了後金城樓に歡迎會を開催するに至れり、當日は山崎、下平、上田、石川の諸教授を始め市内開業の學友、同縣人等總計貳拾七名水入らずの親子同胞話もしんみりして言々句々肺腑より出で、早や温かふる集團は形成せられたり配膳に着席を餘儀なくせられたるの時松原博士發起人を代表して開會の辭をふし田上氏の謝辭次で祝電披露あり、後は談笑快語時の移るを覺はず益自ら重なりては幼児の如く赤裸々の情誠に掬すべく一同大に歡を盡して散會せしは十時ありき。

●河合鷹氏歸朝歡迎會

(明治三十年度卒業)

本校第四高等學校醫學部時代の卒業にして一年志願兵を終へ鯖江に於て開

業一昨年渡歐獨逸ミュンヘン瑞西ベルン大學に遊びストラスブルロに於てドクトルの學位を得て各大學を見分し本月十四日神戸に上陸二十二日來澤せられしを機とし二十三日午後病院會議室に於て一場の演説を試み同六時より大野屋に於て各教授及同窓生等の歡迎會に臨まれ出席者約三十名にて席上同氏の謝辭あり談笑場裡に益を重ね興の盡きるを知らざりき。散會せしは午後十時過ぎありき。

●猪木彦助氏通信

(正月三日、長門長) 府發、八田氏宛)

謹賀新年 明治四十三年盡日は宿直なりしも院長の年賀狀手傳にて夜十時頃漸く歸宅正月の準備に取りかかり破屋相當多少の用意致候
 明けて四十四年元旦と相成候へば飼養の鶏禽曉を報し申候も市街を去る六丁餘の一小部落何等の風情も無く妻と姪との三人詫しくも水入らずに屠蘇を回らし數の子牛夢に濁酒を傾くる幾杯今更の如く而立を越ゆる二歳の今日まで何一つ爲すともなく將來亦徒らに米食ふ虫に過ぎさるか妙ふ處に妙ふ愚痴を馳せ嬉々として學校に登り行く姪を送りながら部落組合數戸を回禮すべく卒業以來お馴染のフロツクコートに破帽を穿ちて柴門を出て申候小林院長邸に至れば馬關本院の同勢小蒸流船にて來り會し獻酒一巡外科某醫學士曰く昨日までは金さ患者に苦しめらるセメテ今日一日ふりとも此苦患を脱れん爲め若かず「カ」の字の附きたる詞を發する者は處するに罰杯の刑を以てせんぞ衆快諾而も唯一人此罰杯を望み「カ」の字の附きたる言を弄するこ盛あるものありオツト之は小生にはあらず本分院第一の豪の者藥劑某酒仙にて候

午后四時過辭去微醉に乗して妻姪を對手に談笑衣は大阪朝日並に日本及日本人を讀み且つ賀狀を認むる外何等の異常も無く候へしかいっし、前後も知らず相成り曉の空おのが姓と特に亥年ふるに因み本年こそはイデアヤ野猪

的に邁進勇進せんかと足踏み延ばしたるハヅミにあたら夢路を破られ申候
右は元日一日の小生が概況にて新陳代謝の盛なる今日小林氏の米を食む
と茲に滿四年醫員中の最故參相成申候最故參と申せば聞きよく候も老朽
して用なき者と思へば又かく情けなく候

宛に角年々寂びれゆく年頭の感いつ理想的新年を現實にするを得べきや今
朝は今より馬關本院へ出張明朝まで宿直の番にて候

在神戸の關氏客廳五日男兒出生全氏の得意想ふへきかり小生は金も出來ざ
れば子も出來ず出世も出來されば勉強も出來ず出來ずくで世を過ご候
へば別に樂もかく悲もかく三百六十五日年新にして人が目出度しと云へば
鸚鵡返へし飲めば酔ふと云ふまでにて特に一日間の動靜として貴命に報す
る様のこともかく何事も日に月に田舎漢化しつゝあるの狀御察被下度候

久保武氏消息

(全上宛)

謹賀新禧 生儀昨暮朝鮮を引拂ひ當大學に來り四月まで止まり亦復或方面
へ遠征(?)に向ふ考に御座候不相變御厚誼のほど願上候尙御序の節御氣の
毒かる小川様御住所御一報被成下度奉願候

元旦

東京醫科大學解剖學教室にて

武

菊地文岱君端信

(一月五日秋田縣
湯澤發八田氏宛)

たゞ賀正では通り一片にていかぬとの御詞恐縮致候早々御氣の利きたる目
毎の繪端書難有拜受任候當地の三日間は大晦日の暴風雪止まずして往來杜
絶四月初めて晴れ申候正月と云へ何しろ寂しき寒空握學丸より外藝當無
之候

此程京都醫學士(一昨年卒業)の名稱を冠せるピラが理髮店に貼布せられた

(校内雜報)

るを見申候左も小生にも開業披露の案内はありたるが敢て僻目根性にはあ
られど何んだか斯る廣告法は余り見受けぬ事まで目新しく妙に感じ申候

杉山政長君端信

(一月五日下午總
結城發全上宛)

御芳墨謹讀重ねて年賀申上候扱て故小川教授與榊永眠の由乍陸聞及居候
へ共御隱居様の御來結は實は其後飯塚中島兩兄に出會の折初めて聞知致候
次第迂生も彼是榮務に忙殺され居候へ共何れ近日中御訪問申上げ且つ今後
及はずふから能ふ丈けの御世話致すべく候いつもふから貴下の舊師に報せ
らるゝの御芳志は只々感服の至りに候

中島誠君通信

(八田氏宛)

拜啓新春と云へ嚴寒の候に御座候處益々御健勝の段奉賀候、陳者當地方
にては時々淺間山の鳴動する外珍らしきことも無之日々淺間山の煙を眺め
居り候故にや昨今の鳴動にもさまで物としも思はず何等の感興も起らず申
候

母校出身者にて吾が信州に開業せるものは甚た少数にて千葉出身の者多数
を占め同校にては「猪の鼻會」と申す同窓會あり、本月八日長野市にて開
會同校教授三輪博士は局所麻醉法筒井博士は六〇六號に就て講演あり、懇
親會に同窓生數十名親しく教授と相談笑せらるゝ様子は誠にヨソの見る目
も羨しく、吾校にても同様の會を設けられ度きものと切望の至りに堪はず
候

吾が信州の醫學界の大あるものは云ふまでもなく長野縣醫學會にて毎年一
回總會を開き、昨年は八月輕井澤避暑の青山博士脚氣阿久津博士勝脱炎の
治療法其他十數名の演説有之候へき、又當地にては佐久醫學會と申す小學

(人事)

術會有之春秋二回開催土地相應のものにて御座候、其外近地同業者數名にて毎月廿五日を期し醫事集談會を催し小實驗等の談話を爲し學術の進歩に遅れぬ様勉め居り申候

昨十一日の新聞紙上にて小原芳雄君の訃音を知り實に驚き申候、吾か信州の母校出の秀才にして前途多望ある青春有爲の士を失へるは我、醫學界の爲め痛惜に堪えざる次第にて候、何か同君の爲めに母校に永遠記念を残す方法無之候や御何致候、尙岡本山田等の諸氏にも御傳の上可然御取斗相成度奉懇願候

一月十二日夜

信州南久郡白田町にて

誠

* * * * *

人事

●教授の昇級 ●高安校長は一級俸を上田教授は六級俸を下賜せらる

●石川教授 ●今回勲六等に叙せられたり。(十二月二十六日)

●鬼頭教授 ●今回從六位に任せられたり。

●脇坂教授 ●去十二月二十七日從七位に叙せらる。

●石坂講師 ●全講師は生理學研究の爲め獨乙留學を命せられたる、

●前號に記載せしが目下京都醫科大學生理學教室にありて研究中あるが愈々來二月に出發せらるゝ云ふ切に同氏の健康を祈る。

●鈴木寛之助氏 ●海軍々醫中監に任じ待命仰付らる。

●河合隆氏 ●(ドクトル)明治三十年度卒業の氏は今回歸朝去二十三日上澤母校を訪問し病院に半日を送り歸朝せられたり。

●寺本義一氏 ●(三十年度)海軍々醫少監に任じ舞鶴海兵團附に補せらる。

●生沼曹六氏 ●(三十一年度)一昨年東京慈惠院醫專校より生理學研究の爲め獨逸へ留學せられし氏は其後月沈原及梵大學等に斯學の蘊奥を極め愈々來九月末歸朝せらるゝ由願はくは益々御壯健目出度御歸朝の程を祈る。

●橋本盛次郎氏 ●(三十二年度)陸軍醫務局課員陸軍三等軍醫正の氏は本職を免じ兵衛歩兵第二聯隊附に補じ陸軍省醫務局御用掛兼勤を命ぜらる。

●田上清貞氏 ●永々獨逸留學中の氏はドクトルの學位を得て歐洲の贈大學名醫を歴訪し去月西比利亞線を経由し昨年十一月二十九日午前六時敦賀に入港出迎の家族と共に直に歸國途中金澤驛に於て先輩ある松原博士同窓の深美氏(外科)堀井、石坂、館、福田の同縣人及杏林會幹事岡田氏知人等の出迎を受け午後二時幾分の下り列車にて歸富十二月上旬出澤歡迎會に望み尙ほ去月末に京都等に遊び近々中より開業せられし筈。

●齋藤賢徳氏、石橋四郎氏、永井學造氏、吉田幡誠氏、等は今回一等軍醫に任せらる。

●吉田幡誠氏 ●(三十二年度)一等軍醫の氏は今回廣島衛戍病院附に補せらる。

●齋藤賢徳氏 ●(三十五年度)一等軍醫の氏は歩兵第六十九聯隊附に補せらる。

●太田長作氏 ●(三十五年度)一等軍醫の氏は今回陸軍々醫學校附補に仰付。

●日野信次氏 ●(三十六年度)金澤第九師團附一等軍醫たる氏は永々

獨逸ミュンヘンに留學中の所本年五月頃に歸朝の手筈ありし願はくは多大の業蹟と見聞とを携ひ來りて會員諸士に見ゆるの一日も早からむ事を望み深く氏の健康と幸福を祈る。

○石橋四郎氏 一等軍醫の氏は歩兵十七聯隊附に補せらる。

○齋藤房治氏 (三十八年度) 去月金澤病院婦人科を辭し郷里に歸り開業準備を整ひ四月頃上京五月頃より開業の由。

○長井健男氏 (三十八年度) 今回海軍大軍醫に任ぜらる。

○永井人雄氏、鈴木修一郎氏、市川久多氏、太田勘市氏、林秀雄氏、赤尾肇三氏、山田茂樹氏 等は二等軍醫に任ぜられたり。

○井口爲四郎氏、大澤誠一氏、寶達佐市氏 等は今回二等藥劑官に任ぜられたり。

○萩野茂次郎氏 (四十一年度) 今回海軍中軍醫に任ぜらる。

○黒田孝夫氏、進士愛太郎氏 (四十三年度) 今回金城病院醫員奉職。

○和田政範氏 (四十三年度) 昨年十二月彦根病院醫員に轉任せられたり氏は卒業后金澤病院山碕内科に研究大に前途多望の士願はくは益々勉勵せん事を望む。

○四十三年度卒業 (陸軍依托生徒) の見習醫官藥劑官は左の通り各隊に分布服務せらるゝ事とあり。

歩兵第六聯隊(名古屋)

中村喜太郎氏、西村福太郎氏、高崎英彦氏、

歩兵第十八聯(豊橋)

坪倉利氏、山科他喜雄氏、竹松常雄氏、

歩兵第三十五聯隊附(金澤)

北川文松氏、村上盛宰氏、荒木榮三郎氏、柴野昇氏、
歩兵第三十八聯隊(伏見)
角田與一氏、辻口文吉氏、牧野新之盛氏、(藥劑官)

○研究の任命

昨年卒業の中にて特に本校研究生を志願し採用せられたる諸氏は左の如く志望の専門科亦左の如し。

内科一部	内藤隆治	山崎重治	伊藤治郎吉
内科二部	奥山義温	吉川六郎	矢吹清
外科一部	折笠圓隆	村田秀三	巨田政信
外科二部	馬詰定衛	深谷藤市	松下嘉右衛門
眼科	鈴木彌	牧田泰	馬場庄次
婦人科	浦晴二	片山常三郎	吉田圓磨
神經科	北川與一	石澤太作	竹内三次

傍聽生として内科一二部及眼科共に七八名の卒業生あり金澤病院内にて約三十餘名の卒業生勉學中あり。

○在外國會員

本會々員にして外國にある者は近頃下平教授、河合馨氏、田上清貞氏の歸朝によりて左の六氏とありたり。因に生沼及小山田兩氏は頃日何れも左の通り轉居せられたり。吾人は切に六氏の健康と清福と成効を祈る。

▲生沼曹六氏 (三十一年卒業。東京慈惠醫學校生理學教授)

Prof. Dr. S. Ohnuma

Mozartstrasse 56. Bonn a/Rh.

▲石森國臣氏 (三十一年卒業。愛知醫學校生理學教諭)

Prof. Dr. K. Ishimori

Physiologisches Institut.

Strassburg.

▲**磯部修一氏** (三十四年卒業) 一般開業。鯖江市)

目下米國桑港市に居らるゝ由ふれども住所不明あり。近着の東京醫學新誌の人事雜報によれば同氏は桑港に上陸以來健康を害せられ目下北米オクスナート市にて加養せられつゝありと云ふ。吾人は前途多望の士が異域に於て病床に横はるの不幸を慨し其全快の一日も早からんことを切望す。

▲**日野信次郎** (三十六年卒業) 陸軍一等軍醫)

Dr. N. Hino

Walterstrasse 23/III e

München

▲**小山田基(舊名繁三郎)氏** (三十六年卒業) 元々海軍々醫。上海開業醫)

Dr. M. Oyama

bei Frau Wolff

Daisenstrasse 13/e

München.

▲**松久祐馬氏** (三十九年卒業)

Dr. Y. Matsushita

Walterstrasse 25/1.

München.

○**ドクトル竹中繁次郎氏**

氏は富山縣泊町の出身にして明治二

十九年本校醫學部を卒業せられ次で東京醫科大學生理學教室に生理學を研究し次で泊町及び臺灣に其技を振ひ蹶然志を立て獨逸に留學ライプツヒに於てドクトルの學位を得て後大阪に呼吸器病專門醫院を開設大に聲名を擧げられしが今同肺結核に對する理學的療法研究の目的を以て再び東京帝國大學生理學教室に遊び歸途郷里泊町に立寄りしを幸ひ金澤病院を訪問し(一月十日)松原博士の案内によりて院内を參觀し次で眼科外來に於て一場の講話を試みられたり則氏が研究せられし肺結核に就きて原因的に持論を述べ次で結核の療法に及び生理的攝食療法及藥物的療法の價值を論じ豫言して曰く肺結核は他日必ず治療すべき光明に浴するを確信し目下ツペリクリン等の注射を研究しつゝありと述べ結核菌は他の或菌を得て始めて毒力を選しくするものからむ亦結核菌は進行性の性質に乏しきものならむと思考せらるゝ故此等の点を綜合して必ずや一定の結論を得べきからむとて大に同僚の意を強くせられたり。

○**長村義一氏逝去**

(三十九年度卒業) 氏は温厚の篤學者にして殊に文筆に長ぜり卒業后山田病院(金澤)に婦人科を研究し次で岐阜病院(佐々木教授の令兄の經營)に内科を研鑽し越て江州愛知川病院にて外科を修め後靜岡市福明館病院にて眼科を専修し次で越後國新發田丸山病院にて眼科主任たりしが先年再び新潟醫學專門學校内科助手たりしが四十三年十二月二十一日に盲腸炎にて澤田氏富田氏等の治療を受けられしが終に逝去せられたり。以上の經歷に徴しても常識の發展に勉められつゝありしを見るべしざるを望しく白玉露中の人とふられしは痛恨の至りからずや。謹んで哀悼の意を表す。

○**正木美澄氏の訃**

君は明治三十九年本校醫學科を卒業し直に陸軍衛生部に入り見習醫官として歩兵第七聯隊に勤務せられ明治四十年六月

陸軍三等軍醫さかり歩兵第十九聯隊附として敦賀に在勤されしが數ヶ月にして陸軍々醫學校に入學専ら軍陣衛生學を研究せられ優等を以て卒業されて再び敦賀に歸隊さる。越て四十一年一月三十一日附二等軍醫に昇進し大に軍隊衛生上に成す所あらんとせられしが不幸宿痾再發して四十三年五月職を退き郷里名古屋に於て専ら攝養意ふかりしが遂に舊臘三十日不歸の客さからる悲い哉。

君は温厚の子學問に忠實にして常に篤實の譽高かりしも今や幽冥所を異にす噫。

* * * * *

會 告

○自明治四十三年十一月六日校外十全會費納付調書
至全 十二月廿八日

金額	期限	氏名
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	村上盛 宰君
金參圓	全	吉田圓 磨君
金參圓	全	黒田孝 夫君
金參圓	全	竹松常 雄君
金參圓	全	牧田 泰君
金參圓	全	高崎英 形君

金參圓	自四十四二年度三ヶ年分	進上愛太 郎君
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	矢吹 清君
金參圓	全	西野宗 之君
金五圓	自四十四三年度七ヶ年分	吉田文 平君
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	大野作次 郎君
金參圓	全	室田茂 人君
金參圓	全	白田重 良君
金參圓	全	重田 稔君
金參圓	全	北川與 一君
金參圓	全	石譯太 作君
金壹圓	四十四三年度分	野嶽利 七君
金貳圓	自四十四三年度二ヶ年分	西村福太 郎君
金貳圓	自四十四三年度二ヶ年分	猪木彦 助君
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	古谷 強君
金參圓	全	鈴木 彌君
金參圓	自三十九年度三ヶ年分	政山龍 雄君
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	山科他喜 雄君
金貳圓	自四十四三年度二ヶ年分	丹羽玄 純君
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	山崎重 治君
金參圓	自四十四三年度五ヶ年分	齊藤房 治君
金參圓	自四十四三年度三ヶ年分	有壁一 雄君
金五圓	自四十四三年度五ヶ年分	小山田 基君

(會告)

(會告)

金貳圓	自四十二年度	二ヶ年分
金參圓	自四十三年度	三ヶ年分
金參圓	自四十四年度	三ヶ年分
金壹圓	全	
金壹圓	四十三年度分	
金參圓	自四十四年度	三ヶ年分
金參圓	自四十五年度	三ヶ年分
金參圓	自四十二年度	三ヶ年分
金壹圓	自四十四年度	三ヶ年分

以上



柴原外男君	伊藤次郎吉君	松田隆君	德木千秋君	内藤隆治君	秋山八百藏君	加藤慶三君
-------	--------	------	-------	-------	--------	-------

次號雜誌發行

三月一日

次號原稿之切

二月十五日



○恩師小川勝陳先生御遺族のこころいも

霜枯の空風は寒く雨は斜に見るから黯澹として萬感交々去來するのとき、料らざりきこゝ泉火葬場裡重れて恩師未亡人を送り奉るの悲事あらんこは想ふいぬる四十一年秋九月愁雲低く垂れて細雨時にいたり人も吾も悵然として泣くくく恩師先生の御遺骸を野邊一すぢの煙さふし奉りしは、尙昨の如く追憶の念いよ／＼新にして暫ばし止むひまさてもふきに、今再び未亡人の君を同じくこゝに茶毘一片の煙さふし奉る、痛恨の情哀惜の念殆んど謂ふ處を知らざるあり。

未亡人鉄侍子の君には生來頗る強健にして會て藥餌に親しみ給へることあらざりしが、たま／＼先生の逝き給へし秋の末つ方よりプロイリチスの症狀あり、一昨年暮よりプロイロブノイモニー次で日を逐ふて、^ロの證候顯はれ、昨夏以來兎角床上の人となり勝にして秋も半ば過くる頃より全く病床を離れ給ふことなく、十一月二十三日黄昏われ岡本氏が餘命幾許もあらざるべしとの注意により親しく病床に伺ひまつりに、聞きしにまさる憔悴の狀ありし昔の佛おく瘦せ衰ひ給ふいた／＼しきは先生のそれにも増して眞に是れ寒山枯木の態、半ば俯き給ふ右側臥は寢返りさへも覺束なくいさ力なき眼を開かせつゝ僅に通ふ露の息、糸より細き聲を出し盡甲斐ふき我等にまで過きし微衷を謝し給ひけるこそ又かく哀れに悲しかりき。

越えて二十六日午前零時十分終に御永眠、これより先き俗に虫か知らずと云ふものにや自ら死期の近づきたるをしろし給ひけん、いつにふく御隠居様を枕頭に呼び參らせ「お母様長々御世話になりましたアトをよろしく」この御告別あり、御隠居様には羨みかけたる老の眼に萬斛の涙を押し「アトは心配しなぐくてもよいおまい等二人(亡き先生と)でよく守てお呉れ」と答ひさせられ、互に御顔見合せつゝ奇くもおのか御誕生日を以て眠るが如く逝き給へぬ、あわれ此際此時心を後に残さしめず無事に兒を育てんさ宣ひし六十四歳の御隠居様の御心中さ最愛なる可憐の三兒(十歳加女子、七歳勝利、四歳勝光)を跡に遺して逝き給へし奥様の御胸の中、察し奉るだに先立つものは只涙の外あらざるあり

十二月三日われ勝利様に尾して主ふる方面の回禮を爲す、而も朝來少しく胃腸の加減よろしからず俄に御嬢様に隨ひ出つること、ばかりぬ、あちこちと經巡り下平教授宅にいたれば女中出て來りて挨拶もそこ／＼「アー御嬢様ですか、オイトシボイ……」と嘆息の聲を放つ、われ覺せず雙眸の濡ふに頭をも得上げて辭し去りぬ、有體に云へば此日われは昨夏令息に先立たれ給へし金子先生にも會へり、又同じく十一月二十六日東京にて脚氣衝心の爲め令息を失ひ給へし村上先生令夫人にも會へり、いづれも前途多大の望を囑せられたる最愛の御嫡男、その悲みやまこまにわのが頼みつる片腕を殺かれたのが生命の一半を削られし思やし給ふらん、直接御悔をも受け又御吊をも申上げしわれの日頃の涙もるきにも似もやらで同情の思に胸塞かりつゝも露一滴落さ

ゞリしに、今思懸くも女中の言により、端なく幸運なる祝福すべき下家と悪魔の爲に呪咀はれたる如き悲運なる小川家との、いかに其のコントラストの不思議あるに連想し御隠居様の可憐なる後姿を見つゝ吾れ知らず涙を垂れて俯しぬ、げに世はいかに事物の進歩し發達して自由さあり平和とされるとも老いてわが手に別るゝと幼にして孤兒さあるほど不憫あるはあらざるへし、貴きも賤しきも親子の恩愛には變りあるべからず富みたりといさ深く貧しきまで淺かるべき、頑世なき御息、懐方の月花につきいふくますく父君を慕ひ母上を戀ひ給ふいぢらし、余は泣かさんと欲するも得ざるあり古歌に曰く「ほろくさ鳴く山鳥の聲きけば父かとも思ふ母かとも思ふ」と……………噫

さるにても曩きに先生を亡ひ今復興に別れ給ふ御隠居様の御胸の裡、行衛もわがぬ三御幼孫を擁して父さあり母とあり日々夜々老いて益々勞働に勞勦を重ね給ふ便りなき御身の、嗚や嗚越し方を顧み行末を案して千萬無量の思にやつれ給ふらん

同しき月二十日朝、御隠居様には三御幼孫を擁して十六年のその間すみふれ給へし當地を後に一先つ下總結城に歸り給へぬ、久方振にて依然たる故郷の山河に對し感慨や一層深からん、昔氣質の氣は御丈夫ふりと云へすでに六十有餘歳の御老體いつ其の體が心に謀叛せぬとも限るまじく、殊に心のゆくまゝに悠々餘命を樂むと事違ひ、之も孫の爲めアレも孫の爲め我が樂みの一切を犠牲に供して夜に日をついで痛苦を力行をつゞ給ふいたゞし、余は泣かさんと欲するも得ざるあり

結城には嘗て先生の大學卒業を待ちつゝ御隠居様御夫妻の佗しく日を送り給へし住家ありけるも先年留守居のもの火を失し正月早々眞の丸焼さありしことあり、從てこたび御歸任に際しても老姉稻葉家をたよりさして雨露を凌がるゝに過ぎず、而も稻葉家とて老婦人達のみ今後腕さかり杖さかり親しく身を挺して萬事幹旋の勞を執る確たる族戚とても稀にして唯一人最も頼もときは宗家水野子爵の東部に在ますのみ、されば差當り子爵とも相談の上今度の處置を定め方針を決せん御意向と承る

願くはかりそめならぬ親子恩愛の情いかに相通ぜざるの理やあらん、夙に「親孝行子煩惱」を以て篤實比なかりし先生御夫妻の、溟漠の裡此老をいたわり此幼を補け扶育の大功を全ふせしめられんこそ我等の心ひそかに祈り奉る處なれ

四十四年一月十六日夜

門生 智證 再拜

因に小川御遺族様には下總結城町字西館稻葉方にて候

* * * * *

尙左の一文はかつて第四高等學校在學中先生の許に在りたる醫學士關格之介氏より岡本氏及小生宛連名の消息あり、掲げて以て御歸住後の御遺族最近の

狀況を偲ひ奉るの料をなす

謹啓

追日寒氣相慕候處御壯健の段奉賀候小川様御遺族去廿一日着京廿四日小生同伴結城に赴き稻葉方に同居致候廿七日親戚故舊相集り御遺骨を結城町孝顯寺に葬り奉り候可憐の孤を扶けつゝ、燒香し給ふ御隱居様の御心中を察し奉りて並み居る人々流涙拭きあへず候へき心もさなきは嗣子のスクロフレ一スふる事にて候よ

東に筑波の翠巒を望み西に富嶽北に日光の白符を眺むる孝顯寺、畔恩師の靈は安らげく眠り給ふ徳を慕ひて自ら來り會するもの數十名にも及び候べし過日の御手紙に就きては御隱居様も御兩君に申譯無之と申され候暇乞のことは素より氣に付き居候へしかどもよく考ふるに故郷さはいひ結城には住むべき家もなく且つ廿年の久しき間に親しき人は大かたなくありて金澤の方却て故郷と思ふ位に候其上結城は町さういひ松任位の人口も無く殊に御邸とて元の士族町は隣も一町も距り豆腐屋さへ來らぬ寂しき所にて候へば中々住みかゝぬる放水野子爵とも相談の上又金澤に歸るやうに相成やも知れずと思召し態々諸先生にも暇乞不仕候へしふりま申され候決して皆様の御親切を忘るゝことは無之候間此點は何卒御推量遊ばされ度願上候尤も諸先生へは小生代筆昨日それ〱禮狀差出し申候いづれ來春四月頃改めて金澤に向親しく御挨拶致さるゝ御都合に候間左様不惡御舍み下され度願上候

水野家にて後見承諾致され候へども目下議會開會中に候爲多忙ゆへ不日子爵自ら結城に歸りて種々財産の整理及此後の方針等相談致さるゝ筈に候間其結果何れに相成候や御通知可申上候小生も昨日成蹟發表助手任命(外科)等有之何か多忙の爲一先づ歸京致候へども不日又結城に罷越し其後の模倣等詳細可申上候御隱居様も來春是非一度御地に參り家の始末も致し且つ皆様にゆつくり御目に懸り御禮申上度さ申し居られ候先は御禮券々御通知迄斯の如くに御座候乱筆の段は平に御海容被下度願上候

十二月廿九日

關 格 之 介

恭 賀 新 年

小川君の病中死後一方ならざる御盡力同君も嘸草葉の蔭にて喜び居らるゝ事さ存候、十數年前君と君の母を金澤に送りたるは余あり十數年後君の母と君の遺子とな動橋に送りたるも余なり感慨如何御推察を乞ふ

正月元旦 八田 様 加賀小松 小林 文 泰

○謹吊小原芳雄君遠逝

新春の空寒月獨り梅花を照らし天地闊として
 聲なきのとき、嗚呼我が醫星小原芳雄君は逝き
 ぬ。君は三十七年本校首席卒業の人、久しく病
 理學講師として育英の任に當り、傍ら本誌主筆
 として椽大の筆を振ひ、且つ學術實習部主任と
 して鞠躬盡瘁せらるること深大。其頭腦の明敏
 にして造稽の該博なる、崇高なる人格と共に夙
 に衆の推重する處たり。而も一朝無限の希望を
 抱いて東都に去るや、さのみ健康の憂ふべきな
 く大學に在つて益斯學研鑽に一生を委ぬと聞き
 しに。今則ち突として其悲報に接す、來を稽ひ
 往を思ふて惋惜の情自ら禁する能はず。茲に哀
 悼の誠を捧けて謹て深厚なる弔意を表す

村上教授及岡本京太郎氏宛

(前署愚弟芳雄事昨秋來健康勝れず十二月歸郷致し靜養中去六
 日終に死去八日葬儀執行仕候、全人生前中は特別の御交誼を蒙
 り殊に一昨年病氣の際の如き實に一方ならぬ御骨折に預り病氣
 全快續て御注意と御教諭に預り居候旨本人も時々語り申候段小
 生より厚く御禮申上候、貴地御交誼に預り申候方々へ一々御知
 らせ申上度候得共小生には遺憾ながら一向不明にて困入申候間
 何卒辱知諸彦へ然るべく御致聲被成下度奉願候(中略)先は御案
 内旁御禮まで 頓首

長野縣上伊那郡中真輪村

一月十日

小原眞一郎

小原君死亡に就ては右の如く訃報に接したるのみにて其詳細を知る能はざ
 れども次號に於て更に詳報せんことを期す、又同君の徳を稱へ功績を永く
 傳へんが爲に何か記念物を遺さんとの企あるも本號切を取急きたる爲め
 尙其成案を見るに及はずして止みしは遺憾あり、いづれ次號に於て具體的
 案を發表すべければ其際は舉つて御賛助の榮を賜はり度謹て大方諸彦に豫
 告す



前金澤醫學專門學校講師

小原芳雄君

明治四十四年元節攝影

小原君名は芳雄明治十六年五月信州上伊那郡中箕輪村に生る、父は儀八郎君は其第二子也、幼にして穎悟、二十二年四月中箕輪尋常小學校に入り、二十六年三月第四年級卒業、翌月箕輪高等小學校に入り、三十年三月第四年級卒業、更に全校補習科に入り、三十二年三月第二級修業、其間嶄然群を抜き常に首席を占め、名聲郷黨に籍甚たり、全年九月金澤に出て私立高等學校豫備學舎に入り、傍ら有賀氏及安江數學塾に學ぶ、三十三年金澤醫學專門學校撰拔試験に應じ、醫學科に入學し、三十七年十一月學術優等首席卒業の榮を擔ふ、全月十八日全校病理學及病理解剖學副手を命せられ、翌三十八年九月廿日講師囑託となり、村上教授の下に親しく教鞭を執る、四十二年三月卅一日依願囑托を解かれ、六月東上、帝國大學病理教室に入り、山極博士に師事し更に研究の歩武を進めて、他日の大成を期す、而も宿痼再び發し、舊臘歸郷、本年一月六日終に白雲に乗じて帝郷に入れり、悲哉

(八田智證識)